十一月十五日は油締めと稱し團子を食する家多し
十一月二十四日は太子の團子と稱し小豆粥に團子を入れて供ふ祭る所の太子は聖徳太子(入寂二月二十二日)か弘法大師(入寂三月二十一日)か其由る所を知らず
十二月末節分の夜は寒明けと稱し炒大豆を室内に撒く之追難の遺習なり
十二月末日には正月用の鏡餅を搗く
客に食事を侑め將に了らんとするに强いて侑むる事あり之をオタチと云ふ
明治初年までは女子にして已に嫁せる者は鐵漿(おはぐろ)を以て齒を涅め既婚の證とし子供をまうけ年稍々長じては眉毛を剃り落せしが近年其慣習廢止せり只年齡五十にも達せるものは之を墨守す
男子の頭髮は幼時より成人に至るも斬髮なり女子は結髮す其樣式は時々の流行に依れども現時は少壯共に銀杏髷又配偶者ある婦人は丸髷とす往々束髮の女子もあり近時分髮の風も亦行はれつゝあり
少女は小學を卒業すれば中級以上の家にては裁縫を修業せしむ
災禍あれば卜筮者に託して吉凶を卜し或は神道者に祈禱をなさしむる事もあり是多くは婦女子の爲ざなり
居を卜し又新築を爲すに當りては所謂方鑑師なる者に地相家相を撰擇せしむる者

あり
丑の日に大根を蒔かす午の日に田植をせぬなど迷信の風あり
正月と七月の十六日は女子の遊び日とし開放の風あり

一三　衛生

衛生を分ちて普通衛生及衛生機關の二となす

普通衛生

空氣

本郡は廣袤五十一方里餘にして之を包有する人口七萬五千五百八十六(大正十一年末)即一方里平均千四百五十八人にして地勢は山又山の農村地方なれば空氣の供給も充分なるべし只市街地をなせる所は人口稠密とも云ふべく其數十三四ヶ所あり其戸數多きは三百餘少きは三四十なりされど宅地廣濶なれば敢て衛生に障害あらざるべし
乾濕の度は梅雨期には空氣濕潤なれ共其餘は乾燥に屬せり

飲料水

飲料水は皆堀井戸のものを用ふれども天然湧出の泉水を用ふる所もあり地質多くは結晶片岩及花崗岩なり往々石灰岩の地も亦無きに非ず而して用ふる所の水は主に

夏季は冷にして冬季は濕氣あり石灰岩地方の水は少しく白濁を帶ぶすべて井戸の構造に欠點あるは近時改良しつゝあり

食物

常食は大概麥飯を用ふ農家にては往々粮飯と稱する米麥に大根を刻みたるを和して用ふるが多し汁は一般に味噌汁なり香物は大根即ち澤庵漬及體菜白菜茄子胡瓜漬其の主なるものなり肉食は魚介鳥獸を用ふれども貧富に從て食用程度に差等あり而して祭祝日等には小豆飯餅强飯牡丹餅等を食す

食膳に上る魚鳥介の主なるもの春季に蝶屬のナメタ及びメタカ或は赤魚メヌケ(四ツ共方言)鱒あり夏季には鱸鯛鰒あり秋季には鮪、鰹、鱒、鱧、鰯、章魚等あり冬季には鳥賊鮭鱒、鱈、スヒ、ネウヲ(二ツ共方言)鮫干鰯等あり

鳥獸類には山鳥、雉子、鷄卵、兎豚を主なるものとす

介類として鮑、牡蠣、帆立貝、淺蜊、蛤、ヨメ貝、鳥貝、赤貝等あり(ヨメ貝以下三ツは方言)其他金海鼠あり海鼠あり蝦あり蟹あり又春季には田螺を食用とす

海藻類は春季に水布、海台、夏季には若布秋季には荒布冬季には昆布鹿角菜フノリ等あり

陸產の製造品には豆腐、蒟蒻、納豆、油揚、葛粉等は主なる料なり野菜及果實類には蕈各種冬菜大根、人參、牛蒡、芹葱甘藷馬鈴薯豌豆紅豆(ササゲ)芥子胡瓜茄子甘藍南瓜甜瓜梅桃李密柑葡萄苹果梨柿等なり

光熱

採光は官衙學校にては硝子戸を用ふれ共其他は一般に障子に依る夜間を石油洋燈にて明を採る大正六年東磐水力電氣株式會社創立各町村漸次電燈を點ず

太陽熱を要するは殊に冬季なり冬季には障子を閉ぢ之を透徹して暖を取る夏季の暑熱甚たしき時は之を避くるに家屋周圍の戸障子を開放して熱線の直射せざる北窓下などに涼を取る其溫度冬季は室內華氏四五十度冬季は八十前後を通例とす冬季には太陽熱足らざるが故に焚火を用ゐて暖を取りしも近來薪炭の價不廉なるを以て炬燵を用ふる者少なからず

氣候

春季は風强けれ共晴日多く薄曇ありて溫暖身に適せり夏季梅雨の候は雨天若しくは曇天なり盛夏に入りて晴天炎熱多く時々雷鳴驟雨あり秋季は冷氣を催ふせども晴天多く身體に可なり冬季の初には所謂風ありて身を刺さるゝが如し盛冬に入りて曇天多く又雪降る若し其れ酷寒に至りては室內華氏氷點以下に降ることありて室內の貯水堅氷を結ぶに至る

冬季に入りてより春半に至るまて邑民一般に足袋を穿く其他の季節には之を用ふる者少し

土地

山間に僻在する地方なれば土地高燥に屬すされど山麓或は田畔に家する所には卑濕の地なきにあらず地盤大凡堅硬なり地震あるも災害を被りしことなし

住家

風俗部に記するが如く農家は主に萱葺平屋造にして商家は柾葺瓦葺、石板、人造スレート、トタン葺等にて二階造多し故に各室の戸障子を閉塞するも多少の空隙ありて換氣自然に行はる家屋の表は主に南方に向ふ室の内外共商家は洒掃略々周到なれども農家は職業上星を戴て出て月を踏んで歸ると云ふ狀態なれば不潔なる家もなきにあらず且萬年床と稱する年中寢具を整頓せざる家も亦無きに非ず

下水は農家にては肥料に用ふる故に時々吸取れども商家商即ち市街をなせる地にては之を放棄して暗渠或は明渠に流注せしむるものあり

小便所は從來は軒下戸側に設けありしも官の注意に依り今日は住屋より四間以上も離れし所に新設せり然るに浴場は浴水を肥料に用ふるために小便所の直上に設るが多し故に入浴の際は臭氣鼻を衝く是小便所兼浴室とも云ふべきなり各室中臺所は半は板敷なれど其他各室には疊を敷く舊來は臺所に莚を敷く者あり

衣服

衣服は風俗部に記せるが如く主に綿服を用ふ襯衣の洗濯一週一回するもあれど十日若しくは二週間に一回す袷の類は二十日前後に一回す綿入に至りては一ヶ年中初冬に一回するが多し農業に從事するものゝ上着は一月以上に一回するも多かるべし冬季に際しては男子シャツを着外出には襟卷を用ふるもの多し女子は腹下を塞ぎたるムジリと稱する筒袖を着るが多し

身體

成人男子の身長は五尺三寸内外體量は十四五貫あるが多し女子は身長體量共男子より一割を減ずるを通例とす男子の頭髮は斬髮にして女子は油を用ひて結髮すされど往々油を用ひずして束髮にし男子にも油を用ふるものあり

入浴は日浴するもの極めて少く多くは三日或は一週間に一回するが多し或は月一回する者なきに非ず垢膩を洗ひ落すに石鹸を用ふれども又皂角（サイカシ）を用ふる者あり

職業

本郡戸數一萬二千餘にして其内農業は一千餘戸商は六百八十工は四百六十餘其四百七十餘戸は自由業即ち官公吏醫師神職僧侶教員會社役員等にして運輸交通に從事

するものは百三十餘戸其他は雜業及未詳なり而して各業中專業は農に多く其他は兼業即商にして農を兼ぬる者多し農業者は糞尿を掬し鍬鎌を友とし營々孜々として雨雪を厭はず寒暑を避けず日出より日沒に至るまで勞働す商業者は店頭に座して顧客を待ち又時々仕入先に旅行する事あるのみ然れども農業を兼ねる者は勞働することは少からず

工業者は主に鍛冶大工左官柾屋桶屋等なり運輸業者は主に馬車を馭する者自動車を運轉する者牛馬を使役して木材又は貨物を運搬する者貨物を負擔する者なり以上は男子の業にして女子は其助手をなす歟又は爨炊(サンスイ)の勞に服す

副業なる養蠶は春秋二季なり斯の季に農工商大半斯業に從事し女子の如きは勞働最も甚だしく夜間も十分の休息も取らざるものあり蠶絲製造も從來は養蠶家戸毎に座繰絲を引きし故女子は該業に從事せしも近來機械製絲工場勃興せしを以て各戸製絲の勞に就く者少しされど少壯の女子中遠くは富士及東京紡績近くは盛岡山ノ目涌谷古川仙台の製絲場に雇傭せられて工女となるもの少からず此等の中には健康を損せし者亦少からず

精神の養護

精神養護の機關は都會に比すれば少きが如くなれど春は庭前の梅桃香を吐き秋は

前山の紅葉錦を晒し山鳥は聲を弄して自然の歌を唄ひ松風は樂を奏して自然の音樂をなすの桃源鄉なれば知らず識らずの中に精神を慰安す加之兒女を喜ばしむるに里神樂あり旅渡りの演劇來り活動寫眞來る少壯年間には雜誌及び小說を繙くあり園碁あり將棋あり只恐る近來の雜誌小說中には往々淫靡の記事ありて修養上の欠陷を生ぜんことを

生活稍餘裕ある者は春季伊勢參宮の次に三都を見物し或は秋季の農閑に湯治と稱し溫泉に行く是等は百聞一見に如かざる知識を吸收するのみならず精神を快活ならしむるの効又少なからず

衛生機關

中央及地方廳の衛生に關する諸法令に基き郡及び町村にはそれに關係せる吏員ありて之を施行し且指導せり加之警吏の督勵ありて每戸春秋の淸潔檢査あり傳染病者あれば之が豫防に消毒に力を盡せり赤痢患者死亡する時は之を火葬に附すなど從來の放任主義に比すれば用意周到と云ふべし本郡二ヶ町二十一ヶ村中衛生組合六百六十一隔離病舍二十一ヶ所あり郡醫師會一私立衛生會一病院一ヶあり現今郡中に住する産婆は十二人なり又近來各地衛生講話及び衛生展覽會を開催して郡內に衛生思想を普及せんとせり

傳染病中最も多く行はるゝは窒扶斯なり之に次ぐを赤痢とすされど赤痢は年に依て消長あり以上の患者は隔離病舍に收容して治療を加へ消毒を施す等最も嚴なり次に發疹窒扶實扶的里なり虎列拉ペスト猩紅熱の如きは最も少なし痘瘡に至つては法令に依り年々或は小學校舍又は便宜の地に兒女を集合せしめて種痘を施すこと再三に至る故に天然痘に罹る者なし

其他傳染性の疾病はマラリヤ、インフルエンザ、結核、黴毒、癩病、トラホームなり就中多きは結核なり黴毒なりインフルエンザなりインフルエンザの如きは治療を加ふれば生命に關せざれ共結核に至つては十中の八九皆生命を殞すに至る實に恐るべきものトラホームは郡中檢診醫を置き便宜の地に公衆を集めて之が檢診をなし患者には治療を加ふべきを命ぜらるれど或は之を等閑に附する輩なきに非ず次に黴毒の蔓延も亦恐るべきもの已發の患者は治を施せば可なりとすれど將來之を陰蔽しつゝ暗に蔓延せしむる如きことあらば患者一己の不幸のみならず施て國力に關係すること少からず加之原因は風俗の頽廢にあり豈忽にすべけんや

第三章　名蹟

東山の地たる山甚だ高からず水清しと雖も細流にして多くは凡山俗水なり然れども江山の美豈觀るべきものなしとせんや即ち四大景のあるあり曰く猊鼻の舟遊室根の登臨東稻の遠望北上の舟行是なり

一　猊鼻溪の舟遊

猊鼻溪は長坂村に在り世に獅子ケ鼻と稱す其の一部分は松川村に屬す全景は沙鐵川の兩岸數町の間なり幾十丈の絶壁屈曲して屏風の如く峙ち河水を護す上游に獅子の鼻に似たる巖石あるより名づけらる長坂驛頭より舟に掉さして溯れば水清くして香魚の游くを數ふべく岸高くして巉巖の奇を仰くべし春の櫻花夏の涼風秋の紅葉皆賞するに餘あり足一たび此境に至らば塵累の身に纏ふを知りさるべし溪中の勝最も著しきもの十五あり近時佐藤猊巖なるもの此勝を鼓吹して天下に問ふ

遊猊鼻巖並引

古龍須田文

猊鼻巖在陸中東山長坂村砂鐵川上流以厥境之幽阻其勝未顯天下也甞有簑蟲山人者以書漫遊造乎其間大禰其奇謂雖豊之耶馬溪不及也遂模寫之以頒同好往年反人芝圃居士亦載筆往遊焉淹留數旬闡幽發微作一大幅揭諸西都書會從此其勝漸爲好奇所知矣今茲戊戌春余放浪訪芝圃干桑折觀其大幅殆神驚魂動之筆也嘆曰嗚呼天地間有如此勝境乎盍一遊焉乃迂路抵東山訪詩人佐藤猊巖干長坂村請爲東道主與

共往探焉溪流澎々激湍飛雪是所謂砂鐵川也掉舟溯流兩岸丹壁削立千尺鐘乳化石黄紫燦爛溪勢紆餘曲々變化凡十七曲溪勢較大而勝亦窮干是矣其間白雲古木點綴生趣正如芝圃畫中所睹雖規模不濶大而警拔斬新稱天下無雙不過言也溪中有多聞窟第一湍々猊鼻巖等諸勝而猊鼻巖在勝之窮處蓋鐘乳化爲猊鼻狀鼻孔噴水潟々如瀑布尤爲奇觀故此溪諸勝以猊鼻一名掩之余也旅次匆々不能文以一々記其勝概姑賦七古一篇以待他日再遊焉

明治三十一年三月二十八日

東山々水天下秀々靈獨鐘猊鼻巖神跡仙蹤無人訪白雲千載空相緘一被簑蟲發秘境再被芝圃開寶函從此尋幽外客到水路半日非多邑我亦曾閲二老書煙霞痼疾思貧饞千里命駕過猊生々々嗜好同酸鹹爲我東道具短舸蚤起共趁峭風巖一溪寒玉碧淙々桂棹擊波不張帆兩崖相壁峽口束丹壁排陳如削劃巖面無數穿空洞々口雲黑竇猢猻多聞窟深不可測中有石佛誰所鑱恐出緇流釋子手彼徒先我探巖扊鐘乳下垂何陸離其色青紫雜白黢奇木如人抱幽石々毛石髮綠髟々鶴鶴集俯蛟龍宅蜂旁如傘披嶄嵌一泉兩泉流巖罅錚々鏘々響韶咸溪勢折爲十七曲々々經來都不凡曲盡溪澗見猊鼻々孔噴水濕藍衫奇哉猊鼻奪鬼魄停棹取瓢酌栝榼紅光入面躍三百棹頭吟句頻呢喃空中唳嘐雙白鶴舞去舞來止高杉試踏雲梯凌絶巘帝宮咫尺可捫摻魍魎魅遠避跡

靈境永言神仙監澗蔬木實美可茹右隨玉液甘盈盃繁菊應得松喬壽齷齪何傷此生纔我心思之不得駐塵事憂草原難芟回棹隨流快如矢巖光斕斑夕陽銜白雲出岫飄素練忽倏如帷掩碧巉歸來作詩貽同好恐被神仙猜詰々

侯爵　二條基弘

來て見よと云ふより外の言葉なしたぐひまれなるこのけしきは

箔軒　大須賀　履

丹青染出石嶙峋斧劈皴皴折帶皴安得縱横通變筆倪黄以外寫其眞
千雙騎在石屏風一道清流曲折通驚起沙禽何處去聲々曳在峽雲中

櫻魂子

夜の秋と日隱す岩の我に立つ
巨巖丈支へてもみづる木鶸音孕むとも

二　東稻山の遠望

試みに國道線平泉附近より北上河を隔てゝ東方を望まば秀峯明媚眞に限界を新にする山のたゝなはるを見ん是即東稻山なり（多和志根とも書す）群峯斷續せる山皺の曲線美は見る人をして恍惚たらしむ峯の最も高きを袴腰といふ山頂袴の腰形に似たればなり此の全山を地方にては長部山といふ山長部邑に屬すればなり後背には田河津に跨る山脈

南より北に走り幾重の峯巒をなす標高五百九十五米突登路三十二町前面は即北上河溶々として流れ穏なり昔時安倍頼時此山に白櫻萬樹を植えて觀賞せしと雖も現に枯れ果てゝ今は只昔の春を想像するのみ然れども山色水光の美は一見嗚乎を呼ばしむ

みちの國平泉に向いてたはしねと申山待るにこと木はすくなきやうに櫻のかぎり見えて花の咲きたるを見てよめる　西　行

きゝもせずたはしね山のさくら花よしのゝ外にかゝるべしとは

おくになほ人見ぬ花のちらぬあれや尋ねて入らん山ほとゝぎす

三　室根山の登臨

東山の東方に巍然として峙てる山あり室根山といふ古くは鬼首山と云ひ奥郡の高山なりと仙臺封内風土記に見えたり折壁村の東北に位して君ヶ鼻山に連れり山の南腹に室根神社あり其傍清泉湧出す山甚だ高からずと雖も温容整然君子の態あり四方より看取せらる標高八百九十五米登路一里十二町頂上は平坦にして柔草壇を布けるが如し此所に憩ふて四顧展望すれば一木の眼を遮るなく近くは西北に蓬萊山峙ち東北方遠く氣仙の五葉山を見る正北は雲烟湮渺の間に岩手の高峯を望み眼下は東山二十三町村のある所丘陵起伏恰も波濤の如し西方遙に中央山脈の栗駒山連峯を望み西南に眸を凝らせば陸前吉岡の七ッ森を雲外に認む若し夫天晴るる時は東南杏として海波の日に映して閃くを見ん其眺臨の壯絶雄大の氣を養ふに足る

東の海の底より室根まで茜さす日は日の本の日ぞ　蘆東山

室根山上望崑崙更向黄河欲問源唯見雲間夕陽映天涯心事與誰論　金菱洲

暮靄朝嵐粧翠鬟千尋秀邑挾雲間閑窓寧英長生術慣看東方無老山　高平眞藤

ふしと見え筑波と見えてさま〳〵に俤かよふ山はこの山

四　北上河の舟行

狐禪寺津頭より舟を浮べて北上河を下らば水流緩やかに斷岸綠樹の蔭潑溂として小魚の躍るを見ん若し夫れ春雨小渦を點ずる時に當りては宇治川の匂をうつして北上やポチリポチリと春の雨といはんとす其靜さ殆ど人寰に非ず左顧右眄すれば或は河側の道行く旅人或は巖上の苫屋より四手網を擧げて銀鱗を漁るの翁を見ん水は碧に山は青く知らず識らざる中に薄衣河岸に達せん益下らば或は洲となり或は渦をなし山或は聳え或は重疊して千狀萬態の山水我を送迎して倦まさらしむ若し夫れ金風徐ろに衿を襲ふの秋ならんには黄海曲田の岸上紅於二月花の落日に映して蜀錦を懸

るを見ん亦快ならずや此は是れ水程十里のながめなり

水上に遠き帆かけも北上の川へをさしてよする友舟
よる舟の北上川の川風もほにあらはるゝ影の涼しさ

以上四勝に亞くへきものを生母の双子山とす山甚た高からずと雖もその眺望の佳なるを以て知らる其他小梨の京の森門崎の布佐窟磐清水の迦陵嬪八澤の竝木ヶ岡藤澤の愛宕山松川の常磐公園等を數ふべし

五　千廐の舊蹟

後冷泉天皇天喜康平の際源頼義父子が安倍貞任を討伐せる時官軍馬千匹を繫ぎし所なるを以て千廐と號すと又平泉藤原氏の盛時馬を此地に飼ひしより邑名となすと(廐に用ひしてふ石窟ありしが新道開鑿の爲め今は發掘し去らる)此兩說孰れか是なるを知らず但此地駒場(駒澤清水馬場等の地名あり千廐驛某々家にて昔時より傳へ來りて馬具の三繋(ソンガイ)(胸がい面がい尻がい)を製せり舊式のものなれば今は需用者なく殆と廢止せり仙臺領廣しと雖も當時此馬具を製するもの此地以外あるなし伊達氏は之を保護して藩の需用に供し或は幕府に献し又は諸侯伯に贈りしなり之を以て見れば千廐の名義謂はれなきに非るべし

六　河崎の柵址

門崎村の南隅砂鐵川口北上河に會する川口の地なり天喜の昔源將軍が貞任を征討せし時の柵址に擬すと大槻博士の說なり

陸奥話記云天喜五年十一月將軍卒兵千八百餘人欲討貞任貞任等率精兵四千餘人以金爲行之河崎柵爲營拒戰黃海干時風雪甚勵道路艱難官軍無食人馬共疲官軍大敗死者數百人云々

(金爲行は氣仙郡司にして官軍に從ひし者其後裔金野或は紺野など稱す千廐の舊邑主金野氏は此の裔なりといへり

七　清悅墳

門崎村川崎に在り高さ三尺周圍六尺許後人雨屋を修し雨露を覆ふ參詣するもの藜の杖を納めて長壽を祈ると云ふ清悅は源義經の臣にして東行に從ひ來り平泉沒落に際し此地に寓して歿す時寛永七年其年壽四百六十餘といひ傳へたり實に奇怪の事なり平泉沒落即ち義經の自害は文治五年なり是より寛永七年まで五百三十七年なり假りに清悅年二十にして難を竄れたりとするも五百五十年餘なり(本文四百六十餘といへるは訝し)清悅が義經の戰鬪の樣を物語りせしを劍術の門人小野太左衛門なる者が筆記せるを清悅物語とて俗間に傳ふ鎌倉雜記に義經の雜色に喜三太な

るものなり名を清悅といへり蓋是ならんか

鹽松勝概云巖截(陸前國宮城郡留守氏故墟岩切也)西北二里有青麻祠山頂峻絕緣鐵鎖攀登祀海尊俗一名清悅源判官從者常言壽三百歳好說判官遺事事頗怪異其稱青麻不知何故

之に依て見れば清悅は喜三太に非ずして常陸坊海尊なる歟海尊は平泉沒落以前に遁れて山中に入り仙人となりしといひ傳へり

八　唐梅舘墟(又蠟梅墟)

長坂驛北方の山上にあり葛西氏族臣千葉介賴胤(吾妻鏡に賴胤なるものなし是胤賴の誤なるべし)の館址なり其後裔鍛治屋某碑を建つ其の文に

蓮清院殿羽林宇正山公大居士

千葉介平賴胤從四位下少將

又其山麓に駈引城址あり或は鍵引城とも書す是は二の丸にして賴胤子孫累世の居城なりといへり

一片殘碑設草萊荒圖吊古此低徊綠陰風度天方夕其實兩三標有梅

關元龍

九　菅公夫人墓

田河津村竹澤堂向に在り傳云ふ昌泰四年菅公筑前太宰府に謫せられし時夫人(紀長谷雄の女)子女三人を伴ひ菅原山城なる者を從ひ膽澤郡へ流されしを同郡藤杜郷清水ヶ在の長者軍治兵衛といへる者母子四人を四ヶ所に分置し母君を今の母體に第一姉君吉祥姫を上姉體に第二姉君梅代姫を下姉體に若君敦茂君を中野に住はせ申しし(より後地名とせり菅公の薨ぜらるゝや大江麻呂なる者之を夫人に告ぐ夫人悲哀の餘病を發し延喜六年九月同地に逝去せらる御年四十二墳墓は當時の膽澤郡母體村即ち現今の田河津村堂向にして菅原山城其祭を成せりと其跡今石碑一基五輪塔二基あり碑面文字殘缺して讀難し只延喜梅代などの文字見ゆ山城の苗裔は今板室屋敷菅原安兵衛といへる者其一族古來梅漬を食せずと云ふ此事よりして菅神を祭り八重檣神社と稱し村社となす

按此事大鏡にも見えず又仙臺封内風土記にも載せず且昌泰延喜の頃は國司將軍にして其の國を管治するに非れば國名を名とせず故に山城の名は不審し又今の東磐井郡田河津は昔膽澤郡に屬せしも據る所なし(膽澤郡に母體と稱する地あり衣川の上流なり)將た居所を地名とせしなど不穩當の事なり此事疑なきに非ずされど西磐井山目の蘭梅山は封内記々事中菅丞相の子奥州に下向しなどいふ事もあれば史家の研究を俟つ

一〇　千手長嶺

千廐より摺澤に通ずる嶺上の路傍にあり摺澤に屬す碑あり長さ三尺許の美なる天然石にして文字なし是源平時代平重衡が鎌倉に檻致せらるゝや日夜其傍に侍した る姫千手前が重衡の誅せらるゝ後狂を發し諸國を周流して此地に到り歿したりし屍を塵めて塚を築きたるを以て千手長嶺と稱せり

按吾妻鏡には「文治四年四月廿二日入夜御臺所御方女房號千手前於御前殺入則蘇生日來無指病云々及曉依仰出里亭云云廿五日今曉千手前卒去年二十四其性大穩便人々所惜也云々」とあり又平家物語には千手の前は手越長者が女にて賴朝の侍女なり命に依り重衡に侍せしが重衡南都にて斬られしと聞「思ひの種にやなりにけん頓て樣をかへ濃き墨染にやつれはてゝ信濃國善光寺に行ひすまして彼の後世菩提をとふらへり」とあるを以見れば諸國を流浪して地方などに屍を横ふべき婦人には非るべしと考へらるれど昔よりの云ひ傳なれば記しつ

一一　町場址

平泉藤原氏盛時の市街地跡にして今の長島村長部に在り字出張より中西に至る通路を反町と云ひ北上東岸の平地には十日町七日町本町等の字あり字矢崎には南町北町の名を存す佐藤庄司の屋敷又士小路跡もあり東鏡喜樂館の條に「往時北上川長部山の麓を流れ其の河東に道路あり長橋を架して往來す後年西畔に流れ亦後に洪水瀾漫して高館々下の地を失ふ」とあれば河流の變ぜしは最も古き事なり今は只稻田麻圃として鍬かるゝのみ

一二　鳥海柵址

興田村字鳥海に在り後冷泉天皇天喜年間安倍宗任據て以て源將軍を防ぎし所なり近時碑を建てゝその古戰場たるを示せり

按宗任の據りて官軍を防ぎし柵は地理上此所にあらざるが如し陸奥話記に

康平五年九月六日官軍得越渡衣川即偷到藤原業近柵俄放火燒亡大驚遁奔不拒關保鳥海柵同七日官軍破關到膽澤郡白鳥村攻大麻生野及瀨原二柵拔之十一日鷄鳴襲鳥海柵行程十餘里也官軍未到前宗任經清等棄城走保厨川柵將軍入鳥海柵暫休士卒云云

復軒雜纂云先輩鳥海柵を東磐井郡とせしは臆測なり此柵趾は膽澤鎮守府址の西北十四五町西根村の字鳥海の地と定むべきなり（初め府趾より西五里永澤村の字鳥海と考へしかど改めたり）

一三　獅山公誕生地

仙臺の名君獅山公は延寶八年を以て大原に生る初め公の生父伊達肥前宗房子を得

んことを邑の八幡宮に祈る驗ありて助三郎君即吉村公を生む(傳記は人物部に在り)その祈請せし願文等は八幡寺にありしを同寺廢止となれるを以て今大原町の鳥畑氏に存置せり近時伊達伯爵より吉村公は大原に於て誕生せる旨の書を大原町に賜はれりといへり(東藩史稿には宮床に生ると記せり)

伊達世臣家譜云田手肥前宗房萬治二年始列一門自江刺郡口内村移住于磐井郡東山大原邑秩三千石子助三郎村房肯山公養爲嗣君即獅山公(吉村)是也次子村興繼父後(宗房實義山公八男也)賜要害地于柴田郡前川邑川崎秩七千石享保七年移住黑川郡宮床邑秩八千石

一四　古城址

文治五年源頼朝平泉藤原氏を討滅したる後從軍の宿將下總の住人葛西三郎清重を留めて奥州奉行とし奥州を鎮せしめ且清重に其管下の五郡六十六島を賜ひ第六代武治(武治は系圖に見えず蓋清貞の誤ならんといへり)の代に登米佐沼の地を略有し第十七代晴信の代に領せし所は牡鹿登米本吉岩井膽澤江刺氣仙の七郡にして其の領地二十萬石なりいひ二十萬石の領主にして其臣隷の數幾許なるか詳ならざれども七郡の各地に臣隷の居館を構へしといふ故趾數多あり城主と稱へ何の守と稱するを以て見れば儼然たる諸侯の如く聞ゆれど是は後人の誇大に言ひ傳へ書殘したるものなる事疑なし今其城址と稱するもの貞享年間仙臺藩に於て取調べしを掲ぐべし

内城山　東西二十一間　南北十八間　二の丸　東西十四間　南北二十二間　母體村

此城主千葉民部天正の末まで居住

東城平　東西五十四間　南北二十二間　二の丸　東西十四間　南北二十四間　小島村

此城主猪岡玄番と申候

西城平　二の丸　東西四十八間　南北二十九間　小島村

此城主小島三左衛門と申候

東條山　東西二十八間　南北二十六間　二の丸　東西七十間　南北二十六間　赤生津村

此城主白鳥治部と申候

西城山　東西十三間　南北四十二間

此城主千葉遠江と申候

濱横澤城山　東西二十二間　南北二十六間　二の丸　東西六十間　南北八十五間　濱横澤村

此城主千葉伊勢と申候

内城山　東西二十四間　南北四十間　二の丸　東西十二間　南北三十間　松川村

此城主千葉民部と申候母體村の民部とは別人也

鳥畑城山　東西二十五間　南北十七間　二の丸　東西二十五間　南北二十五間　松川村

此城主千葉薩摩と申候鳥畑九郎左衛門先祖也

曾慶城山 東西二十四間 南北二十五間　二の丸 東西二十間 南北十九間　曾慶村

此城主岩淵兵庫と申候

山吹城山 東西五十四間 南北二十二間　二の丸 東西五十四間 南北五十四間　大原村

此城主千葉飛彈と申候

折壁城山 東西二十二間 南北二十九間　二の丸 東西二十八間 南北二十八間　上折壁村

此城主千葉右馬之丞と申候

舞草城山 東西三十八間 南北二十二間　二の丸 東西二十九間 南北三十九間　舞草村

此城主佐々木左衛門四郎と申候

羽塲城山 東西四十五間 南北三十八間　二の丸 東西三十九間 南北三十九間　羽塲村

此城主舞草内匠と申候

小梨城山 東西四十間 南北二十間　二の丸 東西三十間 南北十五間　北小梨村

此城主小梨左馬之丞と申候

立花城山 東西六十九間 南北二十九間　二の丸 東西八十六間 南北九十四間　中奥玉村

此城主千葉大膳志津川の城主同人抱の内也

門崎城山 東西四十八間 南北三十五間　二の丸 東西四十五間 南北三十五間　門崎村

此城主門崎安藝と申候

布佐城山 東西十八間 南北三十間　二の丸 東西二十二間 南北二十二間　門崎村

此城主布佐伊豫と申候

西城山 東西六十八間 南北二十五間　二の丸 東西四十五間 南北二十五間　長部村

内城平 東西二十八間 南北二十八間

此城主千葉長門と申候

藤澤城山 東西百十間 南北六十間　二の丸 東西九十間 南北四十間　藤澤村

此城主往昔は大野東入中古は高橋藏入居住也

其後葛西一家岩淵遠江と申者居住

柴又城山四方三十間ヅッ　二の丸 東西六十五間 南北二十五間　釘子村

此城主柴又圖書と申候

二の丸 東西十六間 南北二十五間　釘子村

此城主及川平三郎と申候

天狗田城山不詳　天狗田村

此城主及川上總と申候

中川城山 東西三十間 南北二十六間　二の丸 東西三十間 南北二十二間　中川村

此城主及川掃部之助と申候

遅澤城山 東西三十七間 南北二十一間　二の丸 東西十九間 南北十八間　中川村

此城主及川宮内と申候

柴山城山 東西八十間 南北百二十間　二の丸 東西四十間 南北五十間　猿澤村

此城主中津山三郎左衛門と申候

根城山 東西二十二間 南北十二間　澁民村

此城主及川遠江守と申候

笹町城山 東西十二間 南北二十五間　二の丸 四方二十間ヅヽ　二十一村

此城主笹町新助居住笹町新右衛門先祖也

金田城山 東西二十四間 南北十二間　二の丸 東西十二間 南北十八間　金田村

此城主千葉左近と申候

佐布舘城山 東西二十間 南北三十間　同

此城主及川豐後此子孫佐々布及川氏の先祖也

小梨城山 東西三十九間 南北二十九間　二の丸 東西五十三間 南北二十九間　南小梨村

此城主篠崎三河と申候

津谷川城山 東西十四間 南北二十四間　二の丸 東西三十間 南北二十四間　津谷川村

此城主及川美濃と申候

砂子田城山 東西三十三間 南北十四間　二の丸 東西二十三間 南北百八間　砂子田村

搔引城山 東西二十六間 南北三十四間　二の丸 東西三十二間 南北四十二間　長坂村

此城主千葉刑部と申候

二の丸 東西三十二間 南北四十間

鳥海城山 東西二十間 南北二十二間　二の丸 東西二十五間 南北三十間　鳥海村

此城主安倍宗任也天正の頃及川美濃居住候

河股城山 東西三十間 南北四十二間　二の丸 東西八間 南北七十間　中川村

此城主及川修理と申候

月舘城山 東西四十九間 南北七十間　二の丸 東西二十一間 南北九間　月舘村

此城主千葉安房と申候

清水馬場城山 東西十三間 南北七十間　二の丸 四方十五間ヅヽ　清水馬場村

此城主千葉相模と申候

千廐城山 東西三十八間 南北二十四間　二の丸 東西三十八間 南北二十七間　千廐村

此城主金野右馬之丞と申候白石豐後も居住也

升澤城山 東西十八間 南北二十六間　二の丸 東西三十三間 南北十七間　升澤村

此城主千田隼人と申候

寺澤城山 東西三十六間 南北三十間　二の丸 東西五十間 南北三十間　寺澤村

此城主佐々木新右衛門と申候

濁沼城山四方十二間ヅヽ　二の丸 東西十四間 南北十六間　濁沼村

此城主龜卦川兵部と申候

佛坂城山 東西二十間 南北三十間　佛坂村

此城主佛坂治部と申候

薄衣城山 東西二十五間 南北十七間　二の丸 東西二十九間 南北十七間　薄衣村

此城主千葉中務と申候

黄海城山 東西二十五間 南北四十八間　二の丸 東西二十九間 南北五十四間　黄海村

此城主千葉新右衛門と申候深堀とも名乘なり

熊舘城山 東西三十二間 南北二十五間　二の丸 東西十七間 南北十九間　黄海村

此城主安倍貞任楯籠候城地也外に古城數箇所有之候得共略す

八丁城山 東西十八間 南北十九間　二の丸 東西三十二間 南北三十六間　摺澤村

此城主岩淵大炊と申候一説に小野寺伊豫とあり

以上

（此記事中藤澤城に大野東人城主たりしといふは何に據りたる説なるか眞に疑問なり）

第四章　人物

廣義にて人物といへば學術家もあるべく文藝美術家もあるべく他の技術家及義俠者もあるべし忠臣孝子烈婦義僕總て世にすぐれたる人を擧ぐべきなれど既に教育及學術美術文藝等の目の下に其人々を編入せしことなれば之には他の方面の人傑を揭げて人物編とせり

一　義民八郎右衛門

延寶の交釘子村に八郎右衛門といへる農民あり時の地頭は仙臺の重臣石川大和（或は津田丹波）といへる人なり八郎右衛門は地肝入とて村の徵税役なり當時の地頭は酒色に荒み贅澤を事とせし故費用足らずして調達金又は御貸上げなどいふ名目にて苛税を課したる故村民の苦一方ならず八郎右衛門之を憂ひ如何にもして此の塗炭の苦を救はんと決心し先づ地肝入役を辭し自己の所有物品をば他に嫁ぎし子女に分ち與へ身一つとなり仙臺に至り町奉行などの家に仲間奉公をなし時機を伺ひ居しに偶〻仙臺候が東照宮（仙臺町）に參詣せらるゝ事あり折を得たりと宮町と云所に於て突然一

通の訴狀を青竹に挿み侯に直訴せんとせしに警固の吏に捕へられ糺明の末直訴の罪を以て七北田仕置場(刑場)に於て梟首の刑に處せられたり其首をば親族の者請ひ受けて鄉里に携へ歸り小字藤株といへる所の前なる墓所に埋め塚を築き之を首塚と稱せり碑に寒岩滴水信士天和二壬戌年八月十五日金野氏八郎右衛門と刻せり此墓所は八郎が代々の墓地なりしとぞ時に天和二年なり此事よりして石川氏も咎を蒙り伊具の角田に所替となり隨て釘子村は伊達家の御藏入(直轄地)となりしのみならず元穀納の所なりしも金納の便に改められ一貫文(十石)十切酌(十切は一歩銀十枚)とて輕き稅金となり村民大に蘇息せしかば後の世まで八郎右衛門の德を稱せりと云ふ明治の初年に至り村民八郎を私祭して八郎明神と稱し祠を同村大泉寺前の山に建て祭祀怠りなしと云初め田宅を子女に分與せしは自己が刑せられ田地を沒收せらるゝを知り豫め其處置をなしゝものなり固より一身を捨てゝ村民を救ふ事を自期したるものなり八郎の氏は金野なり今其の親族なる金野氏と親戚なる星氏存續せりと云

二　獅山公

仙臺藩主第五代吉村公は一門伊達肥前宗房の男なり延寶八年東山大原に生る幼名を助三郎と稱す當時宗房は大原の邑主たり故を以て侯は大原に成長せり幼にして同村八幡寺に敎育を受く寺の主僧秉水(興諒とも云へり)と云秉水日々に出てゝ勸化す公子即ち小僧と游嬉す時に年十歳一日行脚僧(名荃菡(ゼンタン)後に獅山公の命に依り宮城郡七北田村洞雲寺俗に山の寺を再興して居らしむ書に巧なりし僧なり洞雲寺の山號は龍門山)來り揖して曰く貴寺に端溪の硯ありと願くは示されよ衆僧師の責怒を憚り肯て出さずして曰く彼の硯は師が秘藏のものにして人の觀るを禁せり且つ師も出てゝ在らずと行脚僧悵然として去らんとす公子曰く彼の貧僧路を迂して來り一硯を見んことを求む風流嘉すべし余は責怒の責を負はん宜しく出して示すべしと衆僧其言に從ふ僧一見して曰く眞に端硯なりとて把玩すること久し小僧之を收めんとして手を失し謖然地に墜して毀る相見て愕然たり公子徐に曰く硯已に毀れたり復全うすべからず余別に說あり汝等憂ふること勿れと乃ち硯を袖にして師の歸るを俟つ少らくして師歸る公子出迎ひて前に當り高く法語を誦す難して曰く形あるもの如何師曰く遂に破滅に歸すと公子破硯を示して曰く遂に破滅に歸せりと師之を赦す是れ公子幼孩の一鎖事のみ而して雅量明辨英姿見るが如し元祿八年藩主綱村公に繼て東奥の巨鎭を領す勵精治を圖り封內を巡視して民間の實情を察す世中興の明主となす良とに以ある哉公國の治むるの餘技詩歌を嗜む正德元年權中將に任ぜられ寶曆元年に薨ず、ここに忠孝に係る詩歌各一首を揭ぐ

呈紅葉於家君並添一絕

初看青女下楓林濃淡染成蜀錦深親自撰來親自折携歸欲慰父公心
（公詩歌書をよくし隣松軒と稱せり大年寺に葬る）

藏王山

天の下民安かれと大君のまゐりそめけん藏王の山

三　孝子五郎作

伊達吉村公は大原に生長せり元祿八年綱村公の嗣となり大守として屢封内を巡視し風俗を察し孝貞節義を旌表す嘗て大原村笹野田に狩せる時村童の駕に尾して來るあり公何所より來ると問ふ童子曰く彼の山腹に住する農民の子なりと公餅を賜はりしに一童は怡んで之を食し了り一童は拜戴して之を懷にす公怪みて問ひしに答て曰ふ阿爺常に兒に敎へて云ふ他人より物を賜はることあらば先づ祖翁に供して其餘を請へと故に之を懷にして歸り祖父及父に供せんと欲するなりと公之を奇とし郡吏に命じて其家を探らしむ果して異行あるの孝子なり其名は五郎作氏を小山と云ふ大原村の民なり五郎作天性至孝能老父彦一に仕ふ家極めて貧にして平生薪を採り炭を燒き米に換へて親を養ふ冬に至れば大原町に出てゝ傭作し風雪甚しと雖も必ず歸省す其道程一里餘如此事數十年殆んと一日の如し公大に嘆賞し擢て大番士となし世祿三十石を賜ふ是れ正德年間の事なりしと

四　忠僕喜助

門崎村に喜助といへるものあり村民孫助の傭夫なり主人に仕ふること忠實なるを聞召され藩主之を賞して三百文の地を賜ふ時享保十一年六月なり其辭令今に傳ふと云ふ

五　星新兵衛

星新兵衛は北小梨より出て一關藩老佐瀨主計の僕となる主計事を以て除籍せられ江戸に浪居せしも新兵衛多年艱苦してよく主人を勞はり主人復籍せられし後藩公邦行（謙德院）に擧げられ臺所役となり星氏なる廢家の後をつぎ士籍に列し藩公の經濟を興せる功あり事は安政前後に涉る

六　傑士呑響

文化の交大原に大原左金吾といへる者あり本姓は熊谷名を翼と云呑響野人雲鄕と號す少壯にして鄕里を出て水戸の重臣中山備前守に仕へ後去りて京師に遊ぶ尋て松前侯の聘に應じて重用せらる經世の才に富み輸出入稅及入津料を收め海防上の意見を献ずる等大に書策する所ありしが侯露艦と通じ德川氏を亡ぼし蝦夷地を露領とせんの謀圖あるを以去て江戸に赴き事を幕府に告ぐ（一說此事なしと云）幕府松前蠣崎氏を伊達の粱川に移封し國替を命ず文化四年幕府松前奉行を置く此時に於て呑響賓僚

僚となり献替する所あり後沼津侯其才を聞き聘用したりと云ふ書畫を巧みにし詩文を能くす遺著に北地危言北地寓談等あり文化七年五月十八日歿す(歿年月は茶山詩集に記せるあり)賴山陽の送序に「今玆吾が識る所の大原雲鄉窮北の蓼辟に應じ往て其賓僚となる雲鄉は奥人にして京師に居る容貌魁奇にして技能多し而して其中軒略あり頗兵を知り房情に曉ると稱せらる幕中其諸謀に備ふべきもの雲鄉を薦む雲鄉慨然として知に酬ひ効を展るの志あり辭せずして往く書を寄せて我に告ぐ我其行を壯とし文を爲り之を送」と又菅茶山の千詩書引應原雲鄉需の句に「近頃聞く間に乘じて豪興を發し千詩千書數日に辨す偉學籍籍遠方に聞え斯の才斯の筆末だ世に見はれず世上只稱す詩書善きを知らず斯の人別に技あるを」と以て其の風貌文才の一斑を見るべし男呑舟名は鯤一字は崑崙父文書を善くし山水に巧なりしと云(雲鄉の墓は京都北野立本寺にありと傳にあるよし)

賀餐英翁七十初度　呑響野人大原翼雲鄉拜

東山之下大原邊七旬依然詣謖仙作歌不關工與描風花雪月任興牽九折山坂九節杖健脚踏雲幾盤旋萱堂退齡過九秩教育能致兒孫賢仙翁事之如童穉萊舞翩躚嬉咲前曾汲岩井釀玉屑共嘗靈液養長年我亦初生同鄉里垂髫隨翁耕山田獨奈仙凡難換骨一旦誤牽功名緣鉛刀何足試一割事業末能報三遷忽得嚴信驚起坐擲梭空過半生天仙翁旭日全華遠隔海遙橫五色煙翁餐全英時來往洗○伐毛度幾千東方之人東方老羨君獨駢曼倩肩王母爲親朔爲子定知雛仙列壽延

文化六年歳次巳巳夏五月

七　青柳文藏

文化の交松川に青柳文藏あり資を献じて仙臺に文庫を設け鄉里には穀倉を置き其貸息を以て鄉民の急を救ひ且文庫の資に充つ玆に青柳文庫記に考へて其の顚末を記さん

人の爲にするを義と云ふ青柳文藏は人の爲にせる者なり文藏の父三達は摺澤に生れ門崎の小野寺氏の養子となり松川に居り醫を業となす文藏は其の三男なり少にして江戸に成長す年十八發憤して父の業を襲かんと欲す以爲らく醫は意なり書を讀むに非れば能くすべからずと時の通儒井上金峨に從て學ぶ金峨貧にして之を養ふこと能はず氏も亦以爲らく資なければ書を讀むことを得ずと是に於て賈人に從ひ商業に從事すること十餘年家少しく康く書も亦一千餘卷を有するに至る以爲らく學ぶに足る然れ共吾今年已に長ず且つ讀み且つ商せば是日も足らずと遂に學資をも資本となして商を營み遂に萬金を累ぬ書も亦二萬餘卷を有するに至り年已に七十是に於て喟然として嘆じて曰く我今此書を讀みて夙志を達すべし然れども精

既に朽たり能く爲すこと莫かるべし如かず之を世の有爲の青年にして吾が少時の如き志を抱き遂ぐること能はざるものに之を讀ましめんにはと因て仙臺府の有司に就き請て曰く府下の空地數歩を賜ひ臣をして一倉を建てしめ名づけて青柳文庫と云ひ二萬餘卷の藏書を供し士子騷客醫と遊方の人をして其の中に業を肄はしめん且つ請ふ資千金を割きて粟(籾)を東山の郷に買ひ大守の威令に賴り郡吏をして時を以て之を發斂せしめ其の十が一を收めて文庫の修理及士子の肄業飲食の資に充て其の餘贏を以て臣が父の郷の貧にして自ら給する能はざる者又病て藥することを能はざるものを救はん然らば臣死すと雖亦憾みなしと大守盡く之を允るす是に於て工を起し成りて書を藏し士子及其他の修學に便す文庫の地積百餘歩仙臺府百騎町醫學館の南に在り後に青柳館と稱す粟を藏するの倉は松川村中里に在り文藏自記の青柳倉記あり

青柳倉記の前半を記せん

市井の臣文藏平生聚むる所四部書(經史子集)凡二萬餘卷及び金壹千兩を仙臺府藩主に上つる延見して百騎町醫學館の地百餘歩を賜ひ青柳文庫を立てしめ以て士子の肄業に供し又亡父の故居磐井郡東山松川村中里の一地に青柳倉を建て上る所の金を以て粟四千石を買ひ以て特に歛散し臣が父祖宗族故舊隣里鄕黨と俱に其の利を同ふし年毎に息を擧げて以て文庫の修理及肄業者の館穀とし及東山の貧病にして自藥する能はざる者に與へん庫倉の諸事は有司に看掌せしめ永世廢せざらんとす越えて一歲文庫成る松崎益城(慊堂)に請ひ石に勒して門の東に立つ青柳文庫記是なり備荒倉の事既に文庫記中に詳なり茲に其の心の感激せる所を石に勒す曰く文藏が祖先は農を業とす亡父三達他に適きて小野寺氏を冒す醫となりて東山松川に居る臣少うして江戸に入り十が一の利を追ひ既に先廬に返ること能はず苟も子あるを得ば歸りて東山に住し以て父母の墳墓を守らんと期す今年既に七十未だ一弱息さへあらず不幸の罪吾其の大に居る者なり一念之に及ぶ毎に未だ嘗て感激して涙下らずんばあらざるなり已にして自ら解きて曰く人の子あるを欲するもの其の業を傳へて父祖の名を顯はさんと欲するのみ苟も子あり不幸にして其の子不肖ならば則ち父祖の績一敗地に塗れん若かず子なきの幸ならんには今吾不幸にして子なし故に藏書二萬餘卷を得亦以て其業を傳へて父祖の名を顯はさば則ち此書は吾の賢子孫なり其外宜しく早く之が所をなし以て其の業を傳ふべきのみ因て其書を大府に上つる大府を以て士子の肄業に供せば則吾子孫其の所を得るもの籍するに千金を以てす大府も亦臣が愚を矜み粟を東山に買ひ時を以て歛散し臣が父祖宗族故舊隣里鄕黨と利を同うし而して其の息を擧げて以て文庫の修理肄業者の館穀と及

び東山の貧病にして自活自藥する能はざる者とに給せば則傳ふる所の業因て墜ちず父祖の遺名も亦以て不朽なるべし而して臣も亦籍を以て無後の罪を償ふことを得ん此皆大府再造の大恩なり臣今死すと雖も憾なし(後半略後半には朱子の社倉法に依る時は凶年と雖も失なかるべきことを記せり)

文政辛卯九月二十五日建

文藏の經歷は前後貫通して詳にするを得る能はざるも蓋資性豪俠にして義を好みし者歟江戸に在り曾て任俠の風あり江戸の俠客等文藏を苦しめんと常に隙をうかゞひしに文藏偶劇場に入りしを見て時到れりと俠客等數輩も場に入り文藏の占めし坐の上欄に憑り頻りに烟を喫し烟糞を文藏の頭上に墜下するもの幾十傍人頭上の烟を見て之を告ぐ文藏之を意とせず知らざるものゝ如く泰然たり俠客等其の耐忍の強きに心服して遂に膝を屈して文藏の前に至り叩頭罪を謝し遂に文藏の手下に就きしと云ふ故に文藏の頭上には燒痕を印せりと

文藏は遂に江戸に歿せり墓碑は東京府下北豊島郡高田村金乘院に在り遺稿に日本諸家人物誌正續六卷ありて世に行はる而して姓青柳と稱するは蓋父の生家の本姓に復せしなり德川時代の末に青柳本と稱する寫本の稗史ありて行はる一冊の紙二十枚程のものにて表紙厚く澁色の横筋を引きたるもの字は大きく五六行なり是當

時德川時代貸本に用ひたるものにして青柳氏の創始にかゝる此等も亦其商業法の一端ならん

八　猪狩新兵衛

文政の交大原に金野義兵衛といへる者あり父を重兵衛と云ひ其の二男なり氣仙沼町猪狩新兵衛の養子となり其の家を嗣ぎ義父の名稱を襲ぎ同じく新兵衛と稱す資性强健剛毅義父より傳ふる所の回漕舟に磐勢丸、金比羅丸、日和丸、順環丸等あり天保十四年八月鰹節乾鰯搾鰯及び煙草等を磐勢順環二艘に塔載し之を江戸大坂に販賣せんとして帆を擧ぐ其の九月三日房州洋に進行するや忽ち颶風の起るに遇ひ磐勢は覆沒し順環は僅に船躰を存すれども貨物の過半を失ふ辛じて江戸に回漕するを得たり新兵衛竊かに以爲らく運命數あり豈天の時を得ることなからんやと乃ち癈船と殘貨とを鬻ぎ吉原に遊び廓の大門を閉鎖し流連數日以て憂苦を掃ふ仙臺に歸るや金比羅日和も趣かに賣却し更に新船を作り亦之を磐勢丸と號す爾後京坂及江戸に漕運する毎に大に失敗せり故に家產も日に蹙まり新船も亦賣却するに至る其の窮困常人の能く堪ふる所にあらず然れども晏如たり嘗て歲末に際し新兵衛の懷にする所僅に二朱金一枚あるのみ之を妻に授けて曰く之を資となし以て舊を送り新を迎ふべしと妻糯米及粗肴濁醪を購ひ來り餅を製す新兵衛は棚を掃ひ夫妻相對して献酬し除夜を送る明れ

ば即ち正月元旦なり例に依り妻は團餅を炙らんとするに炭の焚くべきなし消然として夫に謀る夫笑ひて曰く隣家に至り炊後の餘燼を乞ひ來らば足らんと默座頭を低れて思ふ所あるが如し其後氣仙郡矢作村に至り鑛山の採堀に從事したりしも失敗す家累殆ど餓死せんとす居る暫くして江戸に至り胡粉の製法を受け還りて之を試みるに其効を奏せす大に困窮して一日三食するに足らず而れども意氣自若たり一夜蹶起膝を打て喜で曰く得たり得たりと妻曰く何の得る所ありや曰く余昔江戸に往復するに當り品川大森の間に於て柴海苔の製法を實見せり心未だ之を忘れず只思慮の遲きを憾むのみ余幸に海濱に生活す今品川に倣ひ柴海苔を製せんには利を得んこと必せり只余が爲す所を見よと其妻は夫の鑛山に從事する時も共に艱難を嘗め生死俱にするの貞操を守り末だ嘗て良人を怨疾せし事なし新兵衛即ち本吉郡の沿海地を徘徊し氣仙沼に歸り海水河流と合し海苔製造に適する良場を内の脇に發見し官許を得曾て試殖せる所の海苔を採りて之を漉くに品川産に讓らず是實に安政元年なり新兵衛幸運の際會せしを喜び力を盡して精製し遂に仙臺海苔の名を天下に博するを得たり此の法を受け傳へて業とする者歳に月に多く其績益々宏なり先是新兵衛下總の行德に至り製鹽法を習得し歸鄕して鹽田を開き製鹽業を掬營し好結果を得たり漸時其の業をも大にし多く人夫を雇役し貧民をして各技を分取せしむ依て産を立つるもの數百人其販路開くるに從ひ利を得る亦多し此の二業に依り益々利を得て家を興し之を子孫に傳ふるに至る明治十年十月を以て歿す年六十八氣仙沼海岸山觀音寺に葬る其餘澤を蒙り産を立つるもの及び町民擧て其遺德を慕ひ神明社々地内の一角に別に祠堂を建て猪狩翁靈社とし歳時に之を祭る後明治十八年宮城縣知事より追賞せらる

宮城縣本吉郡氣仙沼村　故　猪狩新兵衛

安政年間武州大森に遊び柴海苔の養殖製造を實見し大に感發する所あり其法を習熟して居村字内の脇に試殖し適當の業たるを信じ漸次近隣諸村に擴め後又總州行德の製鹽場に至り其製法を講し數町の鹽田を開き二業今日に繼續して地方人民の産業となすに至る遺績著大なりとす依て特に其の功勞を追賞す

明治十八年四月十五日　宮城縣令從五位勳四等　松平正直

九　菊地良仙

文政の交奥玉に菊地良仙なる者あり號を棗園と云ふ一ノ關藩士にして世々醫を業とせり少壯にして一ノ關侯の待醫笠原耨庵に就て醫を學び後江戸に遊び幕府の待醫多紀安琢に就て學ぶ又昌平校に漢學を修する數年鄕に歸り一ノ關醫學館長となりし

が數年の後辭して鄉に歸り專ら醫業に從事す此時に方り鶴岡酒井侯藩學の學頭其人に乏しきを以て昌平黌に諮る回答あり曰く現今奥羽中其適任者は仙臺東山の菊地良仙なる者ありと侯人をして氏に就き承諾を得一ノ關侯に請ふて莊内藩學頭とせんとし祿三百石を以て聘せんと約定まり藩士二人を遣はし奥玉の居に迎へしむ良仙偶熱病に罹り遂に起たず招聘の使手を空うして歸れりと云時に文久三年六月なり年三十九著書の現存するもの素問講義傷寒論講義あるのみ緒餘亦詩歌を嬉む

失題

自是延元萬里城滿身膽略轉轟々風流寧落他人後豈以忠精讓孔明

題しらず

遙なる八重の汐路に漕ぐ船を天津雲井に入るかとぞ見る

一〇 孝子清之亟

下奥玉西風屋敷と云へる所に清之丞なる者あり氏を千葉と云ひ父に仕へて孝順なり家貧にして加ふるに父中風病を患ひ起居自由を欠くこと七年勞働の所得を以て父が嗜める酒を買つて侑むること曾て一日も怠りしことなし嘉永年中一ノ關侯其孝を賞し粃十俵及金壹兩酒一樽を賜ふ父歿して後明治戊辰の役秋田に從軍して遂に戰死せり

一一 石川清馬

清馬の父は本吉郡唐桑の人薄衣に來り寓して清馬を生む清馬幼より馬を好む年長じて遠野藩馬術師四戸三平に就き乘馬術を學ぶ業成りて薄衣に歸る地頭泉田氏聘して家臣となし馬術を講せしむ文久年中擢られて藩主伊達氏の御廐主となり技益々熟す維新後馬術を應用して曲馬師となり諸府縣に技を演ず曾て東京に至り芝愛宕の表坂石燈を馬上昇降せしを以て名聲最も著はる今や故人となれり

一二 寛存阿闍梨

寛存阿闍梨は舞草觀福寺の住職なり俗姓を多門と云ふ平泉村の生れなり江戸東叡山に於て灌頂を受け大阿闍梨に叙す仙臺滿願寺に住持たり老て觀福寺に退隱す舞草は人戸三百皆農を業とす敎化行はれずして風俗鄙野なり寛存深く之を慨して謂らく此輩を敎化するは吾が職なりと乃ち其人品を上下に分ち其上なるものには讀書を勸め諭すに忠孝仁義の道を以てす其下なるものには因果應報の理を說きて之を導く薫陶多年諄々倦まず鄉俗一變して人々正に歸す人となり溫和にして慈惠なり徒弟過失あるも嘗て叱責せず又貧にして書具を求むる能はざる兒童には資を與へて之を辨せしむ人に接するに畛域を設けず貴賤となく其の禮を平等にす故に人之を愛親す明治二十年十月入寂す年七十二觀福寺に葬る

一三　孝行太郎

松川村に孝太郎本名を治右衛門といへる者あり妻をトリと云夫妻共父母に仕へて愛敬を致せり父の名は嘉藏家貧にして少許の所有地ありしが他に質入しければ益々貧窮に至る治右衛門年十三にして他に雇はれ勞銀を得て父母を養ふ年二十五にして妻を娶り共に他に雇はれ半里許の主家より毎夜必ず歸りて父母を慰め主家にて酒肴など珍らしき物與へられし時は携へ歸りて父母に侑めたり父性酒を好み醉へば治右衛門に師子舞を命ず是父が好めるものなり治右衛門は起て舞ひ妻は唄うて父の心を慰む安政中郡の有志其孝に感じ金を與へて質地を受け返さしむ此事國主に聞えければ國主伊達慶邦公其孝を嘉みし愛馬玉柳(水青毛)を賜はり之を賞せり時安政元年なり同じき四年夫妻は公の御側近に召され金若干を賞賜せらる父歿せし後も母に孝養を盡しければ明治四年膽澤縣より金若干の賞與あり治右衛門幼名を三太郎と云ひし故に孝行太郎と呼ばる

一四　熊谷伊助

横濱市に熊谷伊助なるものゝ墓あり是千廐の人にして横濱開港の際同地に於て工事の監督或は築堤の請負業をなし大に開港に盡力し沮洳の地を變じて市街地となしたること二三町に止らず今に伊助町といへる町名さへあるに至る遂に其身も富を致し高島嘉右衛門等と頡頏せしに中途疾に罹りて歿せり今其の碑文を掲げん

よきともものきえしときくぞ我はしも　勝安芳
こゝろいたむるひとつなりけり

我が篤く交りし伊助熊谷氏はみちのくの仙臺東山の人其さか溫に才あり又其家を興し友に厚かりしに明治九年六月横濱に於て歿せりときゝさらに驚きいたみ思ふのあまりそのおきつきにたむけせんとて送るになん

一五　孝子順藏

長島村小島に順藏と云へるものあり家世々農を業とせり順藏よく父母に仕へて自己がなし得べき事は嘗て父母を煩はさず年稍長ずるに及びて父亡し尋て母は長病に罹り身體自由ならず順藏日夕看護怠らず耕耘の間と雖へども母の事は心頭を去らず暇あれば安否を伺はざるなし事聞し郡之を賞するに金を以てす順藏年七十二癈を患ひ明治二十六年に歿す其病にあるや偶々盂蘭盆に屬す父母の墓に詣でんとして二本の杖に扶けられ痛を忍びて參りしと云ふ

一六　三好監物

監物は伊達公の重臣にして名を清房と云ふ黄海村七日町に采邑あり慶應四年正月禁内警衛として藩兵一大隊を率ゐて上京せり時會津征討の命下るに會す因て之を報

せんと先づ藩地に歸る時に奉行坂英力王政復古は全く朝旨に非ず」との說を唱へ一藩翕然之を信じ討會の事紛議決せず監物大に之を憂ひ獨り大義を唱へ百方之を說諭し益々嫌疑を蒙り竟に藩務を排斥せらる爾後奥羽諸藩同盟の事起る監物由て其采邑黃海に退く既にして官軍白川盤城兩道より進む是に於て其輩頗る監物を憚り捕へて之を幽せんと捕吏數人を遣る時に監物病に罹り徐々起ち捕夫を待たせ其母に謂て曰く兒の命復保つべからず然れども死して忠義の鬼となり我君をして再び白日を抑がしめん切に請ふ死に先つの罪を許さんことをと又其子酉助俊治欣吾三人を呼て曰く身死するも魂は死せず思ふに三十日を出てず國論反正に歸せん汝等其れ余が志を繼げと後仙臺に在る長子清篤へ和歌を遺して家臣小野寺正兵衛に命じて篤く後事を經紀し從容自盡して死す時に八月十五日なり年五十四監物資性豪邁略々書史に涉り兼て書をよくす閑翁と號す後三十日國論果して一變す人皆其識に服して甚だ其死を惜みしと云ふ黃海村松柏山に葬る豐碑あり其母又頗る賢母なりしと云ふ

題しらず

心だに誠の道を踏み行かば射る矢も石にたつとこそしれ

臨終に近づきし頃

賴むぞよ我がなき後の母上や妻子の上の行末のそら

泊羅にも湊川にも死にかねて心にも似ずきゆるおもひは

一七　坂　英　力

英力名を時秀と云伊達公の重臣にして三好氏と同じく黃海村に采邑あり年若うして大藩の老職となる尋常一樣の庸流に非るを知るべし偶三好氏と意見を異にす奥羽列藩同盟の擧に依り勅諚を蒙り同職但木土佐と共に首謀として死を賜ふ時明治二年五月なり年三十七品川東禪寺に葬る是即ち仕る所の主君に代りて身命を隕せるものなり生を人間に受けたる者誰か一掬の涙なからんや

春日有感賦　英　力

桃花乍散春風憾亦發明年雨露恩人世榮枯何可意冀安分際順乾坤

一八　俗樂者蟻仙

明治の初年大原に蟻仙と云へる俗樂者あり氣仙高田に生れ大原に住す盲目なり大坂の蟻鳳に學びて義太夫を能くし旦三絃を巧みにす曾て大坂の文樂座に出でしことあり傍ら俳歌を好み自ら工夫して紙にて製したる玉章なるものを結び假名文字を記聽し繫ぎて古句を記せり

蟻鳳の句に

來る年も又來る年も花の留主居かな

風吹かぬ内に山越せ旅の人

一九　菊池盛文

奥玉村の菊池盛文は明治十年陸軍醫學を卒業し軍醫試補となり西南役及び日清役に從軍後三等軍醫正に任ぜられ正六位に叙し三十二年勳四等旭日小綬章を賜はる同年七月特旨從五位に叙せられ同年八月病を以て姫路に歿す年四十九

二〇　齋藤郡太

齋藤郡太は薄衣の人士官學校出身にして陸軍大尉に昇進し從七位に叙せらる日清の役に當り病を以て從軍するを得ず遂に鄉里に歿す

二一　熊谷貞吉

藤澤村の熊谷貞吉は陸軍書記より進んで軍吏となり日清役及び日露役に從軍し明治三十八年には金櫃部長として樺太に赴く三十九年正七位勳四等に叙し旭日小綬章及び金を賜ふ召集解除の後四十三年帝國在鄉軍人會の創立に方り東磐井聯合分會長となる大正二年一月病を以て歿す四十九

二二　庄司公平

會慶の庄司公平は士官學校出身にして陸軍歩兵中尉に進み從七位に叙せらる明治二十八年五年病を以て歿す

二三　小野寺圖基易

小野寺圖基易は黄海の人二等軍醫となり日露戰役に從ひ功を以て特に功五級金鵄勳章を受く役止んで東京に私立病院を開きしに大正三年病を以て歿す聞く黑溝臺の苦鬪に吾隊全滅の姿なるを以て後方勤務に在るにも拘はらず將校に代りて戰況報告書を作成せしと云

二四　石田五七

石田五七は大津保村保呂羽の人なり明治二十八年陸軍上等兵より書記に擢てられ計手に昇進し大正四年一等主計に任ぜらる三十七八年戰役に樺太島占領に從軍して功あり韓國守備隊に屬す大正二年正七位勳五等に叙せらる三年臺灣蕃匪討伐に參加し功に依り雙光旭日章及金を賜ふ六年病に罹り歿す年四十五後從六位勳四等に昇叙せられしと云

附錄

一　生物の分布

動物篇

動物中家畜類は農業篇に記すべけれど爰にも重出す是一は體一は用に屬すればなり

記載法は動物學分類に依らず是學術の書に非ずして通俗のものなれば便宜に基づくものなり

獸類

家畜類

牛　馬　犬　豚　家兎　猫

是皆人の知る所なり

野獸類

猪　山林繁茂せる頃には到る所の森林に棲息せり冬季には之を狩りて人の口腹を肥したれど今は其數少うして北部の森林に僅かに種族殘存するのみ

鹿　郡の東南北郡界に屬したる山林に棲息せり冬季には狩獵者の手に落ち其肉皮

市中に上る其數僅少なり

貉（むじな）　郡中少しく繁茂せる森林には到る所に棲息せり冬季狩獵者の手に落ちて其肉を味ふことを得

猿　北部の森林に來ることあれど其數僅々たり

狼及豺（やまいぬ）　昔時は本郡の深山に棲息したれど今は樹木濫伐せられて棲む所なく其の跡だに見ること稀なり

猯（まみ）　人里遠き山野に棲息せり時々獲られて人の口腹に入る其形狸の如くにして小さし眞の猯には非るべし

笹熊　（方言）熊の形態にして小さきもの南方に向きたる山腹に穴を穿ちて棲む時々人に獲らる其肉脂多し

野兎　到る所の山野に棲息し麥苗及苗木類を食して傷害をなす冬季には狩獵者の手に落ち人の口腹に入る

狐　到る所の山野に穴を穿ちて棲息し夜間出てゝ鷄を捕り晝は狩獵者の眼を偷みて容易に獲らるゝことなし往時は往々人の之に誑さるゝものとの迷信ありし又稻荷明神の御使と稱し之に鷄卵など供する迷信者あり

鼬（いたち）　到る所田畑の畦畔等に棲息し夜間人家厨房に入り魚類等を竊食す近來此皮の

價値不廉なるを以てイタヂ箱と稱するものを架け之を捕ふ從前には迷信者此の聲を聞けば宇賀神來ると稱し小豆飯を供ふる者ありし

栗鼠　（方言木鼠）到る所山林に棲み名の負ふ如く栗子を食ふ時々狩獵者に獲られて尾毛は筆結師の手に入る

鼯（むささび）　北部大原邊の森林に棲息すれど其數僅々たり

貂（てん）　森林に棲息すれど其數僅々たり

獺　（方言カウソ）河川の畔に棲みて春季に苗代に入り蛙を捕り食はんため苗を傷害す又養鯉等を捕り食ふ冬季雪痕に依りて人に獲らる其皮價不廉なり

鼠　人家に多し穀器及養蠶等に傷害を與ふること小少ならず之が捕獲に充んため毎戸猫を飼ひ置く又昔時より桝落し虎挾鼠捕箱等近來は板挾網籠等種々の捕獲器工夫せられ又コンモンセンス……或は猫イラズ等の捕鼠劑等用ゐらる

鼹（はつかねずみ）　（方言地鼠）到る所の田畑に棲みて穀菽に傷害を與ふること僅少ならず近來之を防ぐの方法行はると雖も未だ郡中に普からず

土龍（もぐら）　到る所田畑及宅地に棲みて地を穿ち害をなす之を防ぐに地上風車を立てゝ驚かすあり又田畔に板を以て通路を塞ぐなどの方法あれども未だ良法行はれず

蝙蝠　暗窟等に棲み春秋の際夜間出てゝ飛翔す

家禽

鶏

鶩

禁止鳥（法律に依る捕獲禁止）

鶺鴒　閭里に飛來りて冬季には落霜紅の實等を食す

三光鳥　森林に棲む從前は之を飼養せり其聲美にして人を樂ましむ

繡眼兒　山野に棲む

鶯　春季溪谷より村里に出て美聲を弄し人を樂ましむ

山雀　秋季閭里に飛來りて美聲を弄し人を樂ましむ

小雀　四季共山野閭里に群をなして飛翔す一種鶯色にして極めて小きものあり方言杉蟲と稱す

四十雀　秋冬の際閭里に飛來りて昆蟲類を捕食し又荏種等を食ふ

柄長（方言尾長鳥）秋季閭里に來る

燕　春季暖地より來りて人家に集くひ小蟲類を捕食す

鶺鴒　四季共に田野に飛翔す

鷦鷯（方言ミスクグリ）褐色の小鳥なり秋冬の交飛來りてよく穴隙を潜る

杜鵑　夏季空中に美聲を弄し秋季に至れば聲を收めて田野に下り毛蟲類を捕食す

郭公（方言カッコウ鳥）春季山野に於て聲を發し播種を催すが如し布穀鳥の名空しからず

一種方言トドン鳥と稱するあり郭公より形體稍大なり鳴聲トドンと聞ゆる故に名づく

鵂鶹（方言ヤチイボ）森林に棲む夜間出て野鼠を捕食すと云ふ其聲小兒を怖れしむ

鴞　森林に棲む習性鵂鶹に同じ

鳶　四季共に田野閭里の間を飛翔し腐敗せる動物を拾食す

蛟母鳥　夜間閭里を飛翔す

保護鳥（法律を以て四月十六日より十月十四日まで捕獲を禁ぜらる）

秧鷄　夏季田間に巣を營む

鵑　四季共に田野に飛翔し小鳥を捕食せん爲め百舌を弄し小鳥を欺く

鰍（方言花吸）秋冬春の三季山野に飛翔す

鷸　四季共に田野に棲めども夏季は天空高く聲を引く古歌に鷸の羽かき百羽かきといふは是なり冬間は田野に下りて蟲類及芹等を食す其肉味最美なり

鶉　四季共に田野に棲む食膳に供して其肉味最美なり

雉　山野に棲む冬季食用に供して其味最美なり近來散彈にて多く獵せらるゝため其數少くなれり雄の毛皮は標本用として外國輸出品を製せしも防腐劑に砒石を用ふるため今は杜絶す

鶯雉　山野に棲む冬季食用として美味なり

山鳩　山野に棲む秋冬の交食用として味殊に美なり

其他の鳥類

烏　閭里到る所に多し果穀を食ひて傷害を與ふること少からず

雀　烏と同じく閭里に多し群をなして秋實を食ひ害をなす然れども樹木の青蟲尺蠖等を捕食す冬季は食用とすべし

鴿　宮堂の屋上に棲み田畑間の穀菽等を拾食す

鶯　秋季に來る其聲亦賞するに足る

樫鳥　秋季に來り春季に去りて寒地に行く栗櫟等を食す

鶸　秋季群をなして飛來る其鳴聲賞すべし

頬白　シトトに似たる小鳥なり山野に棲む冬季食用とす

巫鳥　田野に棲む冬季食用とすべし

啄木鳥　（方言ケラ）啄木鳥に四種あり稍大なるは綠色之に次ぐは赤白紺色を交へ之に

次ぐは白紺の斑あるもの之に次ぐ小二種あり

ツグ　（方言にして木兎には非ず）小鳥にして椋鳥に似たり秋冬春の交村里に飛來す食用として可なり

アヲヂ　（方言）巫鳥の類にして黃褐の斑紋あり好んで菜種を食ふ

椋鳥　（方言竹雀）春季群飛して田野を翔る其聲喧しゝ

ナンバン鳥　（方言）鳩より小くして茶褐色なり體圓みて嘴眞紅蕃椒に似たるより名づく梅雨の候閭里に飛來りて鳴く其聲ヒョウロローと聞ゆ

マメグチ　（方言）巫鳥に似て體肥え嘴大なり好んで大豆を食ふ食膳に供して可なり

雲雀　極めて少し北部山地に其聲を聞く

葦雀　（方言カラカラジ）極めて少し

隼　山間閭里を飛翔して雉子或は小鳥を捕食す

鷹　田野を飛翔して雉子鶯雉の類を捕り食ふ

ハチバミ　（方言）一種の鷹なり巧みに蜂を捕食す

鴨　冬季北上川及砂鐵川黃海川千廐川等に來る

鴛鴦　四季共に陰所の河水及池水に棲む其數多からず

鶯翠　到る所の河畔池上に飛翔す方言スナゴ鳥と稱す小魚を捕り食ふ

小鴨　冬季河川及池水に來り餌を求む其數多からず

魚　鼈　類

本郡は山地なれば固より沼なく湖なし況んや海をや在る所の水には山間の溪流と大河の北上川を有するのみ故に魚鼈に乏し

鮭　秋季北上川に上り來る其支流の砂鐵川には長坂邊に迄及べども尾數少し薄衣川黄海川にても稀に漁獲することあり

鱒　春季北上川に於て漁す及砂鐵川千厩川(或は薄衣川とも云ふ)黄海川にても漁することあれど其數微々たり

鮠(はえ)　數種あり方言大ガイと稱するは北上川に棲む又方言マルダと稱するも亦一種なるべし單にハエと稱するは小さし方言川ザイと稱するものあり是亦一種なるべし是は冬季氷を割て漁することもあり故に方言シガヲとも稱す四季共に漁すべし北上以外の川には以上四種の内只ハエのみ棲息す又溪流には一種土ハエと稱する小魚ありて棲む

鰻　河川溪流用水堰水田池水到る所に棲む網し釣し又秋季には簗を架して漁獲す

鰻に似たる細小のものに八ッ目鰻と稱するあり川に棲む

鮎　北上川砂鐵川千厩川黄海川其支流なる中流に至る迄溯る砂鐵川最も多く千厩川最も少なし掛鈎狹手網等にて漁獲す又秋季には簗に落つ

鰍　砂鐵川に棲むものは形大ならず皮滑ならず其味滑なるものに劣れり他の溪流に棲むものは色黑青を帶びて滑澤なり是は小魚中の美味なるもの

ズイナシ　(方言)砂多き溪流に棲む小魚なり其味淡泊

スナメグリ　(方言)砂多き溪流に棲む鰌に似て色薄く體平扁なり

ゲキ又ギンギョ　(共に方言)鯰に似て小なり鰭に刺ありて敵を螫す味美なり到る所河川溪流に棲む

鯰　極めて少なし黄海川等にて漁することあり

鰌　川及び用水堰水田池水等に棲み夏秋の交筱にて漁獲す冬季は泥中に潛めるを捕食す食膳に上ること少からず

山鮠　(方言)溪流に棲む鮠に似て體平扁銀色に青の斑紋あり其味鮎に次ぐ津谷川最も多し夏季に漁獲す

鮒　到る所池井等に棲息して多く繁殖すれど大なるもの少し

鯉　池中に飼養す鯡鯉と眞鯉とあり飼養未だ盛ならず

川鰕　到る所河水に棲めど甚だ少し

鼈　(方言ドロガメ)極めて少なし黄海川等にて獲らるゝことあり

ヌカハギ（方言）到る所の河川溪流に棲む蟹なり刺甲堅鋭にして肉少なし摺り潰して肉汁を食すべし

澤蟹　小さき蟹なり田澤溪流に棲む冬季捕りて甲殼共熬りて食す又此の生液を漆カブレに付ければ即治するの効あり

介蟲類

蟲類中最多きは昆蟲なり專門家の調査を遂ぐるに非ずんば盡す能はず爰に普通知れ渡りたるものゝみを掲ぐ

蟻類　種々あり就中赤蟻と稱するは埴を盛りて植物を害すること多し又黑くして成長後羽化するものあり是は家屋の材を蠹す其他種々ありて果樹等に害を及ぼす

蜂類（方言スガリ）數種あり熊蜂及瓶蜂と稱するは家屋或は畦畔の樹根等の枝に巣を營み剪枝をなすに害あり其他土スガリ似我蜂細腰馬尾蜂等數ふるに遑あらず

甲蟲類

蝨（ぜんむし）は水中に棲み鬼蟲は地上に棲むテントウダマシは最も多くして馬鈴薯を始め茄子胡瓜大角豆等を害す又方言山椒蟲は山椒の實の如き黑色の甲蟲にして最も多く秋季大根の嫩苗を食ひ大害をなす又田龜に似たる方言麝香蟲と稱する惡臭あるものは果樹に大害を與ふ又瓜蟲は瓜を害し象蟲は米を傷つく螢は夏夜の徒然を慰むれどそれに似たるシミと稱する甲蟲は養蠶及鰹節等を傷害す其他黃金蟲、天牛、玉蟲、カミキリ等數ふるに遑あらず

蚊蠅類

響蛆の蠅は桑葉に蛆子を產み蒼蠅は傳染病の媒介なし靑蠅は食肉類を早腐せしめ方言馬螫蠅と稱するは牛馬は無論人體を傷害す虻類亦同じ蚊は夏夜の安眠を妨げ方言ブトと稱する細小の蚊は耕耘採桑に際し人體を傷害す又楢の葉に卵子を產む蠅あり其葉形は團子の如し方言楢の木坊主と云ふ其他種々あり

蟬類

赤蟬、ミンミン、蜩等あり方言ありて其聲を以て名つく其他種々あり

蝗類

蝗と稱する綠色のものは秋季田間に群生して稻葉を食す又蟷螂あり方言イボ蟲と稱す促織あり螽斯（きりぎりす）あり蟋蟀あり及鈴蟲は聲を弄して秋夜の徒然を慰む其他數ふるに遑あらず

昆蟲類　の一種に方言斑猫と稱するあり紫紺色にして形狀蛾の肥大なるものゝ如し

以上は昆蟲類なり

蚯蚓類

蚯蚓には紫色なるが多し又褐色のものもあり方言髪毛蟲と稱するは白髪の如く細くして雨後庭潦に生ず

蛇類

青大將は方言青ノロシと稱し縱筋の斑あるを白ナブサと稱す到る所に多し山ガカシも亦多し方言油ヘビと稱する紫色或は淡黑色にして細長のものあり又往々黑色のものもあれど人に害を及ぼさず蝮蛇は方言クチハビと稱す村里到る所に棲息す此毒牙に罹るもの往々あり大に警戒を加ふべきもの

蛙類

青蛙赤蛙は到る所の田野に棲み春季苗代田を攪亂する害あり青蛙殊に然り池水河堰に棲むものに方言ドスビッキと稱するあり皮膚淡黑疣多し一種川に棲むものに河鹿(かじか)あり鳴聲清涼にして人耳を慰む又樹木の葉上に棲むものに雨蛙あり雨ふらんとすれば鳴く其色綠色と淡黑斑紋あるものとあり常に草木に聚る害蟲を捕り食ふ蝦蟇亦到る所の陰地に棲息す方言フルダと稱す

蠑螈類

キモリは池中或は泥川に棲みヤモリは陰暗の屋下若くは樹根に棲む方言ウナキサンと稱するは泉水に棲む其形キモリに似て小さし

蜘蛛類

ジョロー蜘蛛は網を張り小羽蟲を捕り食す其種類最も多し戸立蜘蛛は樹根に棲む足高蜘蛛は室内を匍匐す總種類は大小夥多にして數ふるに遑あらず

ダニ(方言)叢林に生じ人體及犬猫等に附着して皮肉に咥入る其形狀扁き大豆の如し

百足類

蜈蚣には三四寸のものもあり家屋木材等の間或は朽木土石間に棲む又方言ゲチゲチと稱するものは夜間室内を匍匐す

草履蟲は家屋の陰所に生じ食物等に集る

蠼蛄類

ケラは田畑の畦畔等に棲み小孔を穿つ故に田水を涸らすの害あり

蜥蜴類

トカゲには光澤あるもの及び無きものあり茶褐色のものあり縱筋の斑あるものあり山野に棲む

蛭類　水蛭は水田池水に棲み山蛭は地上に棲む

蝸牛類

方言ヘビタマクリと稱す到る所の陰地に棲む

蛞蝓は蝸牛の如き貝殻なくして匍匐す

螺類

堀川に棲むものは甲殻淡黒にして地上の陰地に棲むものは薄白し共に細小なり田螺は到る所の水田(石灰土を除く)池中に棲む春季拾捕りて食膳に供す

其他　衣類圖書等に傷害を與ふる蠹魚あり動物に寄生する蚤虱あり植物に寄生するアブラ蟲ありイボタ蟲あり植物の養液を吸收す又蝶類に化すべきものにして稻に傷害を與ふるブイ蟲、ウンカ、ユリムシ、ハマグリ蟲等あり桑樹果樹を傷害する枝尺取クハカミキリ、キンケ蟲、クハゴ、綿蟲、貝殻蟲、ノコギリ蟲等數ふるに遑あらず

植物篇

植物を記述するに當り分類法に依らず日常の部類分とせり是人生々活上便宜なるものあればなり而して要少きものには說明を附せず或は通常人の知り得るもの亦然り

郡内所在の植物にして十分の調査を遂げしならば他に幾多のものあるべけれども編纂上歲月の許さざるを遺憾とす

近來洋種植物の試植せらるゝもの最も多くして數ふに遑あらず故に是等は載せず植物中重出するものあり躰用異るが故止むを得ざるに出づ

穀菽類

禾穀

稻　大麥　小麥　裸麥　燕麥　粟　稗

蜀黍　玉黍(方言タウギミ)

其他往々薏苡(方言ズスダマ或はハチコク)を栽培す

菽　菽

大豆　小豆　菜豆(いんげん)　豇豆(さゝげ)　豌豆(方言ニドマメ)　刀豆

鵲豆(ふぜまめ)　其他往々蠶豆落花生を栽培す

雜穀

蕎麥　胡麻　罌粟

蔬菜類

根菜

萊菔(又蘿蔔或大根)　蕪菁　胡蘿蔔　牛蒡　藜　菜(方言ナツナ)

甘藷　青芋(方言いもの子)　佛掌藷(方言イチヤウイモ或はカナゴサイ)　薯蕷(方言ラクダイモ)

馬鈴薯(方言ニドイモ)　卷丹(ゆり)　葱　葱頭(たまねぎ)　蒜(にんにく)　韮(にら)　蓮根　慈姑　山葵(わさび)

其他稀に蕷蒟蒻等を栽培す又山野の自生に山薯蕷あり

葉菜

漬菜　冬菜　甘藍　萵苣(方言キジナ)　芹　菠薐草　紫蘇　蕺荷　椎茸

其他山野に自生するものに椎茸ムキ茸(方言)山百合野蜀葵(方言ミツバ)土當歸欵冬筆頭菜蓼蕨薇あり

菌類には松茸シメヂ栗蕈(方言栗の木モダス)松茸青頭菌茅蕈(方言カヤモメチ)紫シメヂキノハナ(方言)サヽモダチ(方言)竹モダチ(方言)楮モダチ(方言)等あり皆食膳に供するに足る

果菜

茄　蕃茄　高麗茄(方言)　蕃椒(方言ナンバン)　胡瓜　甜瓜(方言デウリ)

漬瓜　南瓜　扁蒲

其他稀に葫蘆絲瓜苦瓜西瓜等を栽培す

果樹類

林檎(苹果)　梨　柿　菓子胡桃(方言)　石榴　梅　桃　杏　李　栗　櫻桃　胡桃　榧　銀杏　荷葡　スグリ　油桃　茶莢(方言茶グミ)

其他稀に樹莓草莓草櫨(方言ボウカイ梨)榲桲等を栽植す又山野自生のものには通草栗莓赤莓榛枳椇等あり栗子の如きは山林より拾收するもの最多し

牧草類

苜蓿　紫雲英(栽培極め て少し)　刈豆

山野自生のものに萩薄雀の茶引草藤こまつなぎ葛等種々あり

工藝作物

楮　大麻　皇麻　櫻櫚　蓼藍　荏(方言チウネ)　向田葵(多くは觀賞用とす)　人參(藥草)　サフラン　川芎

近來稀に三又樹を植う又山野自生のものには薄荷蛇麻草黃蓮等あり

特用類

煙草　桑　茶　桐　榛

材用類

杉　赤松　栗　檢　落葉松

又近來アカシヤ及ボフラ等を試植す

山野の自生には刺楸(方言セヌキ)四照花(方言山グワン)白楊縱櫟等あり

薪炭用

櫓　櫟　仙楊　山檀　山毛欅　そね(方言葉は櫟に似て材質もろし)是其主なるもの

觀賞類

楓　梅　櫻　水松又おつこ　落霜紅　黄楊　柊　兒手柏　檜柏　錦木　滿天星　百日紅（方言さるすべり）　椿
木芙蓉　槿　碧梧桐　玉椿　南天　躑躅花　杜鵑花　青木（方言）　海棠　桎　菊　萬年青　玉蟬花　酸
漿　水仙　鷄頭花　紫金草　翠菊　檜扇　石竹　鳶尾花　葵　鳳仙花　松本草　雁東紅　櫻斗菜　鐵線
秋海棠　河骨　紫陽花　芭蕉　天笠牡丹　福壽草　蘭　石菖　庭石菖　虞美人草　木賊　コスモス　縞芒
以上は普通栽培のものにして近來は洋種のフクシヤ貝細工、ベコニヤ撫子、金蓮花、松葉
牡丹、除蟲菊、アネモネ、含羞草等數ふるに遑あらず
其他山野自生のものに菫、桔梗、杜若、七階草（方言）鐘草、蒲公英、女郎花、櫻草、敦盛草、螢袋、山吹
藤、等種々あり

救荒類

虎杖　嫩芽は煑て食し葉は干して煙草の代用に可なり
午膝　若芽は煑て食すべし
牛皮稍（方言コンガミ）根は蒸して餅となすべし
鼠麴　煑て餅に和す
山慈姑　根より澱粉を製す
青莢葉（方言マキ）嫩葉は煑て食すべし
蘩蔞　煠て食すべし

にがな　嫩葉は食するに堪ふ
七葉樹の實　實は餅を製し又澱粉を製すべし
萆薢　根は煑て食し又澱粉を製すべし
地しばり　葉は煑て食ふに堪ふ
をとこへし　嫩苗は煠て食ふべし
萱草　嫩葉は煑て食ふに堪ふ
酸漿草（方言雀の袴）葉は梅干を製するに用う
すゞめのえんどう　煑て食するに堪ふ
香蒲　穗は綿となし又火口を製し白芽は煑て和物となす
よめな　嫩苗は食用とすべし
蓬　嫩苗は煠て餅に和し草餅を製す
大根草　根草共に食すべし
桜　芽は煑て食すべし
蒲公英　葉は煠て食ふべし
沙人參　嫩葉と根とは煑て食ふべし
胡兎子　實は鹽漬となし又炒りて食し葉煑て食すべし

鴨跖草　昔は花より染料を製したりと云嫩葉を食す
　　齊　煠て食すべし
うつぼ草　嫩葉は食ふに堪ふ
五加　葉は煮て食ふべし
前胡　嫩葉は食ふに堪ふ
若菜　嫩葉は煮て水に浸し苦味を去りて食すべし
山蒜　苗根共煠て食すべし
車前草（方言ビッキノ葉）葉は煮て食ふべし
烏芋（方言池スゲ）水田に生ず根は煮て食ふべし
赤車使者（方言ミズ）莖は摺りてトロロとなし又鹽漬として食す
檪實（方言シダミ）澱粉を製し又煮て餅に和して食ふべし楢實も亦同じ
枸棘　葉は煠て食ふべし
葛　葉は秣となし根より澱粉を製すべし
山椒　嫩葉は香料となすべし
藜　葉は煠て食ふべし
商陸（方言唐ゴハウ）葉は煠て食ふべし根に毒性ありと云ふ

木天蓼　嫩苗は煮て和物となし實は鹽漬として食すべし
鱗龍膽　葉は煠て食すべし
萎雅　根は澱粉を製し又煮て食ふべし
皂角　嫩葉は煠て食ふべく莢は石鹸に代用すべし
さるとりいばら（方言地獄ばら或はモガクバラ）嫩葉は煠て水に漬て食すべし
　　さ　山中に在る細竹なり實は粉にして食すべし
紫蔓　葉莖を煠て乾かし後煮て食すべし
瓜　瓜の嫩なるは鹽漬となして食し實よりは油を搾るべし根は搗きて濾し粉を製し餅を造るべし
蕓嵩（方言アザミ）嫩苗は煮て食す
きくいも（方言五升芋）塊根は煮て食し又澱粉を製す
桔梗　幼芽は煮て食し根は漬物となすべし
めなもみ（方言バカ）葉は毒蟲に螫されたる時揉みて其汁を附れば効あり又煠て食ふに堪ふ之に似たるものにヲナモミあり是亦食ふに堪ふヲナモミハ互生葉にしてメナモミは對生葉なり果實はよく衣服に附着す
卷耳　嫩葉は煠て食ふべし

じやのひげ（方言タツノヒゲ）根は砂糖漬として食すべし

蓴菜　生食又は煠て食するに足る

榎　葉は漆かぶれを治し嫩葉は煠て飯に雑へて食す

旋花（方言カラマリ）根及葉は煠て食すべし

莧（方言ヒャウ）多く畑に生す葉は煠て食すべし

遠志　野に生ずる細草なり嫩葉は煠て食すべし

菱實　池中に生す實は生食し又煑て食す

もみぢさう（方言シドケ）嫩苗は煠て食ふべし但烏頭と誤るべからず

酸模（方言スカナ）嫩葉は煑て食ふべし

莖葉共煠て食ふべし

忍冬　煑出したる汁は澁柿をさわすに用ゐ又嫩葉は煠て食ふべし

蒼耳　煑て食すべし

たかとうだい（方言タカド）煠て餅に和して食すべし

繼子の手（方言）葉の中央に花あり嫩葉は煠て食すべし

有毒類

龍葵（方言牛ホヽヅキ）

蒜藜蘆　室根山に生す高三四尺黄白色六瓣花

馬酔木（方言アゼビ）

接骨木　花葉共に有毒なり

ぼたんづる　田畑の畦畔に殊に多し

へびのだいばち　赤色の實簇生すること萬年青の實に似たり

とりかぶと　袋形の紫花を開く

どくうつぎ　河邊原野に生する灌木なり對生葉にして赤き實を結ぶ兒童之を食て往々死に至る

榕　寺院などにて佛に供するもの

どくぜり（方言馬芹）池澤殊に多し

半夏（方言ヘブス）畑に多く生ず

田がらし　水田等に生ず小黄花を開く一時誤り傳へて肺病の妙藥と稱せしことあり

曼陀羅花　里邊に自生す茄幹の大なる如きもの漏斗形の淡黄花を開く實の莢は桐實の形狀にして中に黑く粒あり

博落廻（方言トンボカラ）河原及路傍に生す長五六尺葉に丸刻ありて毒草なれど害蟲驅除に効ありと云ふ

野葛　樹木に攀登す葉は一柄三葉なり實は漆に似たり
天南星　陰濕の地に生す形狀ヘビの大バチに似たれど赤き實を生せず
鬼縛（方言ナニハヅ）灌木なり柳の葉に似たり初夏赤き實を結ぶ
白屈菜　路傍宅邊に生ず黃花を開く葉に丸形の刻あり莖を折れば黃汁出づ有毒草
なれど此汁を疣に附れば治すと云ふ
醉魚草　北上沿岸黃海に多し春季紅紫色の花を開く
回々蒜　濕地に生ず夏季五瓣の花黃花を開く花後金平糖形の實を結ぶ
きけまん　路傍に生する紫華曼に似て花の色を異にす葉は人參に似たり
きんぽうげ　田畔に生す五瓣の黃花を開く花後金平糖形の實を結ぶ
石蒜　竹林の邊などに生ず夏枯れて秋葉を生ず六片の美花を開く
寄生木（方言ヒャウ）栗樹の枝に寄生す小形の實を着く
其他種々あらんも調査未詳なるを以て掲げず

路傍草

菫　ヒメハギ
犬薺　白犬薺
タビラゴ　ルリ草
薺ナツナ
オキナ草（方言ゴマノヒザキ）
スギナ

風車（方言車花）　ウツボ草
ジャノヒゲ（方タツノヒゲ）　ミツバシャウマ（方言ミツバ）
犬胡麻　猩々袴
カハラ松葉　ナミキサウ
ノゲシ　車百合
イカリサウ　ニガナ
コンロン草　ミヤコ草
タネツケバナ　犬ガラシ
カキドホシ　チゴユリ
ヤブクワン草　山ラツキヨウ
ネヂ花　カキラン
ミゾソバ　タニソバ
蓼　犬蓼
スイバ（方言スカナ）　マヽコノシリヌグヒ
イタドリ　キノコヅチ（方言バカ）
螢袋　ヨメナ
コケ龍膽
ミヽナグサ
メハジキ
カタクリ
サクラサウ
アツマギク（方言アメフリ花）
ウマゴヤシ
ハタザホ
キボウシ
ノビル
ヤブニンジン
ハヘトリ草（方言）
サクラダデ
ウナギツカミ
ツリカネニンジン
ヤマシロギク

シオン
ヌス人ハギ(方言バカ)
金水引
ヘビイチゴ
ベンケイ草(方言フクレ草)
アマドコロ
アカソ(洗濯に用う)
青ヂシバリ
イケマ(方言コンガミ)
ナデシコ
ゲンノシャウコ(方言猫足)
オホバコ(方言ピッキノ葉)
龍膽
ヤブタバコ
メナモミ(同上)
ウメバチサウ

ヤブレガサ(山地にあり)
岡虎ノ尾
大根草
スベリヒユ
ミソハギ
クズ
ヤブマヲ
地シバリ
ミヤマ草(方言サルハカマ)
ツメクサ
ヘクソカツラ
オトギリ草
センブリ(方言タウヤク)
ミヤコ草
ヤブジラミ(同上)
ツユグサ

モミヂサウ
ミヅヒキ
キジムシロ
トリアシシャウマ
ドクダミ
キツネマメ
スヾメウリ
カラハナ草(一名ホッブ)
カウゾリナ(方言カヤガクビ)
カタバミ(方言雀の袴)
ヲミナヘシ
トモエサウ
オケラ
オナモミ(方言バカ)
ノダケ
ソクヅ

血止草(方言ヒル草)
ヒメムカシヨモギ
鬼ノヤガラ(方言盗人の足)

田ウコギ
秋カラマツ草

禾本莎草類

チガヤ
スヾメノテツバウ
ニハボコリ
芝
ハマスゲ
三角スゲ
ススメリノヤリ

エノコロ草
スヾメノチヤヒキ
ヒメジハ(方言角力草)
カルカヤ
ミヅガヤツリ
井(方言キグサ)
菖蒲

カモジ草
カゼグサ
チゴザヽ
スヽキ
フトヰ(方言ナホヰ)
スヾメノヒエ
オホガヤツリ

ノボロギク
ギシギシ(方言シノハ)

水草類

アサヾ
蓮
サヽナギ
カハタデ

カハホネ
ミヅカシハ
オモダカ
フサモ

ジユンサイ
水葵
水オホバコ
ヒシ

ヒルムシロ(方言ビルモ)　エビモ
ガマ　葦
川ゼンマイ(方言)　ウキグサ
コモ草(方言)

隱花植物

イヌワラビ　クサソテツ(方言山ソテツ)　ヲシダ
ヤブソテツ　小タニワタリ(方言虎の尾)　スギコケ
ハヒゴケ　ゼニゴケ　ヒカゲノカツラ
マンネンタケ(方言孫杓子)　サルノコシカケ(方言木の耳)　ホコリダケ(方言マヽダンゴ)
菌類は其他多くして方言風袋紅モタチ馬喰モタチ等數ふるに遑あらず食用菌類は根菜類の部に讓る

雜木類

公孫樹　川柳(方言イヌコ柳)　花柏
楡　柳　柏
榎　樺櫻(方言)　黄蘗
ヌルデ(方言カツノ木)　厚朴　マダ(方言)
辛夷　澤フタギ(方言)　桂

烏樟　板屋楓　トリトマラズ(方言)
サルナメシ　ウソツボウ(方言山オガラ)　矢梨(方言)
ミヅクサ(方言)又ミヅノ木トモ云フ　榊
苦木(方言)　山漆(方言)　エゴノ木(方言ゲサノ木)
合歡木(方言ネムタノキ)

灌木蔓生類

ノバラ　コメゴメ(方言)　枸橘
山査子　マツブサ(方言)　クマ柳(方言)
山葡萄　ツタ　木ヅタ
ウコギ　コマツナギ　芝柳(方言火吹柳)
エビヅル(葡萄に似たり)　ウツ木　メドハギ(方言)
アブラ萩(方言)　グミゴ(方言)　ソヾミ(方言)
牛コロシ(方言)　ゴクナカセ(方言)　河原グミ(方言)
マンサク(方言)　コクサギ(方言)

竹類

呉竹(方言チンチク)　孟宗竹　苦竹(方言カラ竹)

寒竹(方言細くして節高し)　黑竹(方言)　淡竹(はちく)(皮白く筍早生す)
大明竹　シヤコタン竹(篥に斑紋あり)
以上は宅邊に栽植す　矢柄竹(提灯のヒゴに用う)　篠竹(笊等を造るに用ゆ)
スヾ竹(方言行李籠の材料)
態笹(方言)
以上は山野に自生す

二　言語

言語を分ちて遺傳の發音及び普通の口語方言の三となす普通口語は繁雜に渉れどもその使用法を顯はさんがためなれば止むを得ざるに出づ而して往々方言の交れるあり是れ語の連絡上亦止を得ざるなり

方言は元來舊仙臺領方言の遺習なり然れども數多の中には方言に非ずして一般語なるものもありそは自他を區別すること難きに依てなり

形容詞は本郡特有のものあれど多くは普通なるものなれば繁を厭ひて省きつ

遺傳の發音

發音中シとス(濁音共)及びチとツ(濁音共)は根本的に謬れり元來スとツとはウ列の音なれば尾韻にウの響あるべきに然らずしてイ列に發音する故スーウツーウと呼ばずしてスーイツーイと呼べり之を羅馬字に寫せばスはsiツはtsiとなるを以てスとシとは同音の如くに聞えチとツとは同音の如くに聞こゆるなり是我郡のみならず奥羽一般の誤謬にして世に奥羽のズーズーと笑はるゝ所以なり

ハ行の發音も亦正しからず只唇頭のみ使用して口を開かぬ故にバビブベボ(假に符號を用ふ)ときこゆマ行の音も亦唇頭を輕く使用する故に正しからず又サ行のセも舌を使用せずして多く齒によつて發音する故にシュときこゆるなり

遺傳發音の一例

ア列の音がエ列に轉ずるもの　前(まへ)　メアー
相手(あひて)　エアーテ
イ列の音がエ列に轉ずるもの
蚯蚓(みみず)　メメズ
ウ列の音がア列に轉ずるもの
蹋る(くくむ)　カガマル
エ列の音がア列ウ列に轉ずるもの
叫ぶ(さけぶ)　サカブ　嬉しい(うれし)　ウルシイ

オ列の音がウ列に轉ずるもの

漏る　ムル

重母音ミを長音節に變ずるもの

見える　メール

清音の濁音に轉ずるもの

桶　ヲゲ

濁音の清音に轉ずるもの

始め　ハシメ

直音が拗音に轉ずるもの

桟敷　シャジキ

音の轉換するもの

死ぬ　シグ

清音の促音に轉ずるもの

引裂　ヒッサク

ア行音の他の音に變化するもの

岩　ユハ

栗の木　クリヌキ

櫻　サグラ

同　オナシ

去る　シヤル

霰　アラネ

御馳走　ゴッソウ

燻　ユブル

末音が助辭と融合して長音に變ずるもの

蚊が食ふ　カークフ

テハデハの融合して長音に變ずるもの

見ては惡るい　ミテアーワルイ

結合語の融合變化するもの

見て居る　ミテル

音の增加するもの

苦い　ニンガイ

木のしん　木ノシンベ

此の外に名詞の下にコを附すること最も多し是音の增加に非ずして一種の接尾語なり

一例

石　イシコ　鍋　ナベコ　猫　ネココ　家　エーコ

普通の口語

口語には他に對して敬語を用ふるもあり故に自ら階級を生ぜりそを區別するに上輩に(上)同輩に(同)下輩に(下)と記せり

それは惡る　ソレアーワルイ

然うではない　サウデアーナイ

眠つて居る　ネムツテル

同じ　オンナジ

板の端　板ノハジベ

普通口語を一々擧るには其數多くして尨大の冊子をなすが故に只一二の用例を本語の下に掲げたり

稱呼			
自分を	(上) ワタクシ(青年間には僕)	(同) ワタシ	(下) オレ
對手を	(上) アナタ	(同) アンダ(君)	(下) オマヘ(貴樣ニシ)
第三者	(上) ドナタ	(同) アノ人	(下) アイツ
人を呼ぶに	(上) 誰サマ	(同) 誰ドン(君)	(下) 誰アニ
呼はれて答ふるに	(上) ハア	(同) エー、ハイ	(下) アイ
事物の多きをあらはす爲め又漠然とあらはすに添ふる語			
自分方を	(上) 私ドモ	(同) ワタシラ	(下) オラ
他人方を	(上) アナタ方	(同) アンダガタ	(下) オマヘダチ
物を	紙やナニカ	筆だのナンダノ	
事には	ソンナコンナ	行クノナンノ	

のみの意をあらはす爲めに添ふる語

アナタダケ	コレッキリ		
物を指す語			
コレ(此)	ソレ(其)	アレ(彼)	ドレ(何)
コイラ(此等)	ソイラ(其等)	アイラ(彼)	ドイツ(何)
コイツ(此奴)	アイツ(彼奴)	ソイツ(其奴)	
場所を指す			
ココ(或はココナイト共云)(此所)	ソコ(或はソコナイト共云)(其所)	アソコ(アソコナイド)(彼所)	
ココラ(此邊)	ソコラ(其邊)	アソコラ(彼邊)	コッチ(此方) ソッチ(其方)
アッチ(彼方)	ドコ(何所)	ドッチ(何方)	ドコラ(何邊)

方向を指す

コチラ(此方)　ソチラ(其邊)　アチラ(彼方)　ココイラ(此邊)　ソコイラ(其邊)　ドコイラ(何邊)

過去をあらはす

買ッタ　借リタ　飛ンダ

未來をあらはす

買アベ(否定には買アマイ)　折レベ(否定には折レマイ)

將然の語

折レサウタ　逃げサウダ

動作の引き續き

風が吹イテル(テルはテ居ル)　水ガ流レデル

目前の有樣

人ハ通ル　犬ハ走ル

事柄を確定するに

コレデ善イノダ　明日ハ日曜ダ

推量

來ルカ知レナイ　止メルカ知レナイ

未來を推量し兼て打消の意をあらはす

逃げマイ　止メマイ

意思をあらはすに

書クベ　讀ムベ

打消をあらはすに

足ラナイ　善クナイ

我に能力あるをあらはす

讀マレナイ　取ラレナイ

先方の適當せる意先方に然る資格の具はり居る意を

カナイ食ハレル　届カレル

願望する語

見タイ　食ヒタイ

命令の意をあらはすに

(此以下餘情を殘す語まで各々階級あれども繁を避けて獨同輩語のみを掲ぐ)

歸ラハレ　着サハレ　アガラハレ

禁止の意をあらはすに

ソンナ事スサハルナ　早ク止メサハレ

人に問ふ意をあらはすに

未ダ來マセンカ　歸リアスカ

自ら疑ふ意をあらはすに

ドウダカネアー　ヨカンベネアー

反語のいひ方

ソンナ事アルモンデスカ　今頃來ルモンデスカ

對手をして注意及反省せしむる意を表はすに

サウデコアースマイ　ソレデヨイノデスカ

問の形にて眞意は斷定する意をあらはすに

モウクル事デハナインデスカ　私モ一緒ニ參リマスベ

追想する意を表はすに

サウダッタネアー　面白カッタネアー

甲の語を乙に語るに

斯ウ言ッタサウデス　明日マタ來ルト言ヒマシタ

噂をする意をあらはすに

止メダト云事デゴアース　色々ナ事ヲスルサウデコアース

假定し且抑ふる意に

サウハイギマスマイ　程ガアッタモンデゴアース

假定又は條件をあらはすに

明日雨ガ降ラバ行キマセン　ソレデ善カラバ持ッテ行カハレ

提示する意の語

小刀ならここにゴアース　見ラレタモンデゴアセン

義務をあらはす語に

是から行カネバナリマセン　此を書カナクテハナリアーセン

語殘を强むる語

ソレデハ誰ダッテ困ルサネアー

感動をあらはす語

ヤンタ事アネアー　面白イ事アネアー

餘情を殘す語

早クオ出デナハレバヨガッタニ　アガッタラヨカンベーニ

敬意を表する語

所ガネアーシ　サウデネアーシ

此のネアーシの語すべて上輩に應ずる語の結果に用ふナ及ノを代名詞の如く用ゐるもの

一本參錢ノナを五本買ッタ　隣ノナヲ借リル　此ンナノ

方向を示す語(東京などにてへといふもの)

家サ歸ル　山サ行ク

此のサは常に使用する事多し

助辭ヲの代りに上の韻を延長するもの

飯——食フ　書——カク

と云の約語

何チウ人　佐藤チユウ男

カ及ダリの用例(ゾの意)

ドレカ頂キタイ　誰カ居ナイカ

誰ダリコイ　ドレダリ取レ

撰擇する意の語

湯デモ持ッテ來イ　教員ニデモナル

小を擧て大を言外に悟らしむる語

紙一枚ダテ麁末ニスルナ　手ダテ足ダテ洗ッタ事ハナイ

動作の極言をあらはすもの

アナタニマデ御迷惑を掛ケル

卑下する意

己ノ様ナ者ガ　百姓ナンドハ

强むる意をあらはす

夫コソ大變　錢一文ダッテ

他の附屬物を抱合するに

皿マデナメル　風呂敷マデ遣ッタ

その儘の意をあらはすに

ソレナリニシテ置ク　今朝食ッタキリ

他のものと區別する意

オレバカリ働イテッマラナイ　アノ人ハ口バカリサ

未然カ否かを問ふに

食テシカ　見テシカ

並列する意の語

昨日モ一昨日モ見タ　雨ハ降ルシ風ハ吹クシ

トソコデの意をあらはすに

三時ニナルド立チマス　來ルドスグニ

理由をいふ語

天氣ガヨイカラ乾ク　アレダカラ困ル

意の反轉する即ち雖の意をあらはすに

雨ハ降ルケレドモ強クハナイ　三杯食ツタケレドモ未ダ足リナイ

背反の意即ドコロカの意をあらはすに

見物は扨置キ飯米ニ困ル　他人ヲ惠ムハ扨置キ親類ヲ

而しての意をあらはすに

サウシテガラ　ソレガラシテ

語を改めていふ意の語

トコロデ昨日ノ一件ハドウデス　ソコデ先刻申シタ通リ

則の意をあらはすに

サウスルト痛イ事　スルト短氣ナ人ナンダカラ

ソコデの意をあらはすに

デ早速ノ事ニシナケレバナラン

假定する意

ソンナラ斯ウ爲マス　デハ斯ウシマス

夫故にの意をあらはすに

夫デ私ハ態々參ツタノデス　ソレタカラ私ハ心附ケタ

然るにの意を表はすに

ケレドモサウハイガナイ　併シガラサウ許リモデマイ

但尤の意をあらはす語

併シ割引キシナイサウデス

且及且又の意をあらはすに

ソレニ毎日遊ンデ許リ居ル　ソノ上値段モ安クナイ

況やの意をあらはすに

ソレサ此方ハ貧乏ダカラ　ソレサ小サイカラネア

左の諸語の用例

ナニシテ

何ニシテ默ッテル　ナニシテ止メタ

ドウモ　ドウモ困ッタ　ドウモ呆レテシマウ

トテモ　トテモ生キベート思ハレナイ　トテモ食ハレナイ

キツト　キツト來ル　キツト居ル

ギツシリ(確との意)　ギツシリ詰メル　ギツシリタングック(縋るの意)

決シテ　決シテソンナコトハナイ　決シテ飲ミマセン

マサカ　マサカソンナ事ハシマイ　マサカ來ハシマイ

ドウセ　ドウセ始メダカラ　ドウセ行クノダカラ

イヅレ

イヅレニシテモ困ッタ事　イヅレ御工夫下サイ

何ダカ　何ダカ夢ノヤウダ　何ダカ心持ガワルイ

何デモ　何ンデモ斯ウダト思フ　何デモ二時頃ダッタ

ドウシテモ　ドウシテモ分カラナイ　何シテモ行キキマセン

何ガナンデモ　何ガ何デモアマリナ仕方ダ　何ガ何デモアンナ奴サ

ナアニ　ナアニ構ハナイサ　ナアニ知レタコトダ

ドウゾ(ドウカも此意に同じく用ゐらる)　ドウゾ御頼ミ申シマス　ドウカ來テ下サレ

ゼヒ　ゼヒ拾圓ナケレバナラナイ　ゼヒ行カナケレバナラヌ

セメテ　セメテ五圓ダケデモ
セメテ七分三分ナラ
イツソ　イツソノ事斯ウシテシマヘ
イツソ止メテシマアーカ
セツカク　セツカクノ事デ
セツカク手紙ヲヤツタ
トニカク　トニカク相談シテカラ
トニカク是レ迄ニシタ
トモカク　トモカク見ナイバナラヌ
トモカク
ソレハトモカク私ガ困ル
ビツシリ(犇との意)　ビツシリ來ル
ビツシリ詰メテ
何ンシロ　何シロアブナイ
何ンシロ面白クナイ
ナニシロ

ナニシロ尋常ナ事デハ……　ナニシロ困ツタ事ハ出來タ
モシモ　モシモ死ヌヤウナラ
モシモサウナツタラ
ヨシンバ　ヨシンバコツチガ惡イニシテモ
ヨシンバソンナ事ガアツタニセヨ
サスガ　アノ人ハサスガダカラ
サスガ名人ダ
ナカナカ　ナカナカ承知シナイ
ナカナカ來ナイ
サウダカラ　サウダカラ行クナトイツタ
サウダカラヤメルモンダ
サウ　サウモ思ハナイ
サウ有ル筈ダ
丁度　丁度ニ合ハサツタ
丁度ニブツツイタ
マルデ

マルデ馬鹿ダ　　マルデ煮ル

ヤハリ　ヤッパリ　ヤッパシ

（ヤハリは上輩にヤッパリは同輩にヤッパシは下輩に用ゐらるが多し何れも同意義なり）

（上）ヤハリ同ジテコザイマス（同）ヤッパリ同ジテゴアス　（下）ヤッパシ同ジサ

今ガタ

今ガタ一寸見エタ　今ガタ來ルカラ

コノゴロ

コノ頃ハ風ヲ引イテ　コノゴロ漸ク出來マシタ

コノアヒダ（略シテコナイダ）

コナイダ見エナイヤウダ　コナイタ珍ラシイ物ヲ

ツギノ日

ツギノ日ニナッテカラ　次ノ日ハ雨ガ降ッテ

イッカ

イッカ來ナイコトハアルマイ　イッカ緩ックリ御話シシマス

イッダヤ及イッダカ

（イッダヤ及びイッダカの二語は同意義に使用せらる而してイッダカは何時デアッタカの約言なり）

イッダヤ申上ゲテオイタ　イッダカワスレタ

イマニ（未に）

イマニ便リガナイ　イマニ來ナイ

イマニ（直ニ）

イマニ直ル　イマニ雨ガ降ル

ナガイ事

ナガイ事待ッテ居タ　ナガイ事怺ヘテ居タ

シバラク

シバラク御目ニ懸リマセン　シバラク東京ニ居リマシタ

時々

時々マヰリマス　時々腹ガ痛ム

チョット（チョッコラ共云）

チョット來テ下サレ　チョッコライッテ來マス

イチド

イチドニタベル　イチド飛ビタッ

シジユウ
シジユウツイテアルク
ノベツニ(平等にの意)
休マナイデノベツニ歩ク
フダ(多の意)
アノ家ハ人ガフダダ
メツタニ
メツタニ來ナイ
ツヒ及ツヒニ
ツヒ寄ツタ事ハナイ
ガケ
歸リガケ
シナ
往ギシナ
今更
今更申譯ガナイ

シジユウ暇ガナイ
水ガ出テ田モ畑モノベツニナツタ
水ガフダニナツタ
メツタニ見タ事ハナイ
ツヒニ食ツタ
磨キガケノ鎌
暮レシナ
今更止メロ共言ハレナイ

全ク
全クナイ事デス
スツカリ
スツカリ切リトル
スツキリ
スツキリ五升アル
シツカリ
シツカリシタ人ダ
スツパリ
スツパリ飲ンダ
ソツクリ
ソツクリタンガク(タンガクは持上げるの意)
ソツコリ(静にの意コツソリモ同ジ)
ソツコリ拔ケ出タ
マンザラ
マンザラ知ラナイ共言ハレナイ

全ク嘘デス
スツカリ直ツタ
丁度スツキリダ
シツカリシテ居ロ
スツパリ止メタ
ソツクリシテ居ル
ソツコリ往ツタ
マンザラヤン(厭)デモアルマイ

タツタ　タツタ一本
モー　モー來ル位ダ
モー少シ　モー少シ
ナンボ(何程)　此肴ハナンボスル
御年ハナンボデス　大層人ガ出タ
大層　大層大キイ南瓜
マツト(東京のもつとに同じ)　マツト食ヒタイ
マツトホシイ　モ少シ見テ行グ
モスコシ(イマスコシとも云)　人ハ澤山出タ
モスコシ待ツテ居ル
澤山　澤山殖エタ
ナマナカ　ナマナカナ眞似ハスルナ
ナマナカナ事ハシテハナラヌ

ブハント(ナカラハンバも同じ)　ブハントナ事ヲスル
ブハントニシテ置カレヌ　ナホ親ニモ相談シテ
ナホ　ナホ委細ハ明日
ナホノ事　アナタガオ出デニナレバナホノ事
ソレナラバナホノ事　テンデニ持テ行ク
デンデニ(手ニ手ニ)　オモニ食物ガ賣レル
デンデニワケル　カウシテ見タラ
オモニ(主に)　アアシテ見タラ
オモニ和製バカリダ　ドウ考ヘテモ
カウ(斯)
カウユウ風ニ
アア(彼ノ如ク)
アアユウ風ニ
ドウ(何樣)
ドウユウ風

ワザワザ(態々)　ワザワザ行クニモ及ブマイ
ワザワザ使を遣る
ワザト　ワサト聞エヌ振ヲスル
ワザトアンナ事ヲスル
タッテ(如何にもして)　タッテ行カネバナラヌ
タッテ仕様ガナイ
タッテ(目立て)　タッテワルクモナイ
タッテノ事デモナイ
ミスミス(看々)　ミスミス知ラヌ振モ出マイ
ミスミス構ハナイデモ置カレマイ
タメシモノニ(試ニ)　タメシモノニ食ッテ見ル
タメシモノニヤッテ見ル
トウトウ(遂ニ)　トウトウタホレタ
トウトウ見エナイ
タテラレナイ(物の多きをあらはす)　見タテラレナイ
食ヒタテラレナイ

ゾロット(點列)　ゾロット蒔イタ
ゾロット列ンダ
トロット(ゾロットに似たれども稍整然たる意あり又平等の意にも用う)　トロット眠ッテ居ル
トロット下ガッタ
トロペー(連續)　トロペー眠ッテキル
トロペー食テキル
ゾックリ(整然)　ゾックリ出來タ
ゾックリ揃フ
マデイニ(丁寧又は儉約かの意)　金ヲマデイニ遣フ
マデイニ洗フ
テンデ　テンデ嘘ヲツク
テンデ一割ハネル
ヨホド　ヨッポド(共に稍多くの意)　ヨッポド行ッタ
ヨホド強イ
マッタノ(其外の意)　御振舞ダノマッタノテ
洋服ダ靴ダノマッタノテ

マッタリ(其外にもの意)
着タリマッタリシテ
サンザン(重ネ重ネ)
サンザンニ負ケタ
コソ　ベ及び　ゾ　ベイ
ソレコソ善カンベ(べは善の反語)
ダガ　及び　タガ
何ダカ知ラナイ
ナル　及び　ナイ
病氣ニナル
トンデモナイ(不圖)
トンデモナイ目ニ遇ッタ
感動詞の種々
ナ
オマヽ食ッタナ(飯を食ふたかの意)
ネアー

遊ンダリマッタリシテ
サンザンナ雨フリ
ヨクゾ來ベイ(來ベイは來るの反語)
見タガ分カラナイ
來ナイ
トンデモナイ事ヲシタ
サテサテナ

ソレデヨウガスカネアー
ヤ
ヤ何トシタ事タ
手ヲ切ッタヤ
何ダト……ダテ
何ダトアノ人ハ死ンダテ
ノ　サ
オレモ見タノサ
カナア
サウカナア
エーシ
エー歸ッタトシ
デ　バ
醉ッタデハ
何シ……ダテ
何シ……大病ダテ

サウデアスカネアー
ヤサウナッタノカ
食ヒタイナ
何ダト燒ケダッテ
年モ取ッタノサ
歸ッタカナア
往ッタデバ
何シ……止メダテ

語勢を強むる語
ソコダ其ノ時
語勢を休むる語
サウデスネアー
平生用うる感動詞
オヤ
オヤサウデスカ
オヤオヤ
オヤオヤアナタハ誰サンデシタカ
アア
アアサウデス
アラ
アラ何ントシテ
ヤア
ヤア魂消(たまげ)タモンダ
ドウモハヤ及びドウモハア

所ガデス
アノナンデスネアー
オヤソレハオ目出タウ
オヤオヤ珍ラシイモノ
アアソレハ悪ルカツタ
アラ大キナ事
ヤア大キナ南瓜ダ

ドウモハヤ遅クイタシテ
ソーラ
ソーラ困ツタ事ハ出來タ
コレハマア
コレハマア皆毀シテシマツタ
イヤハヤドウモ及びイヤハヤ
イヤハヤドウモ困リ果タ
ヤレ
ヤレ烟草入ヲ忘レタ
ヤレヤレ
ヤレヤレ語ラナイデヤツタ
ソレアー
ソレアー困ツタ
ナニ
ナニ火事ダト
サア及びサアサア

ドウモハア御申譯御座イマセン
ソーラ何ントシタ
コレハマア埒モナイ
イヤハヤ何トモ
ヤレ雨ガ降ツテ來タ
ヤレヤレ忘レダツタ
ソレアードウシタラヨカンベイ
ナニ怪我人ガ出ダテ

サアオ出デナサレ
サアサア早クシロ
デバ（感動辭に似たる命令詞）
止メロデバ
人を呼ぶに用ふる語
モ　シ（モシモシと重ねても用ふ）
モシ誰サン
オイオイ
オイオイアノ人
ヤアヤア
ヤアヤア戻ラアンエ
コリヤコリヤ（コラコラも同じ）
コリヤコリヤ一寸コイ
人に應答する語
ハイ及び　ハイハイ
ハイサウデス

サア始メロ
サアサア落シテシマッタ
食ヘデバ
モシアナタ
オイオイマタンセ
ヤアヤア待ダアンエ
コラコラ何ヲスル
ハイハイ今參リマス

ハ　ア
ハアサウデス
ハハア
ハハアサウデスカ
ウ　ン
ウンサウデス
ナルホド
ナルホドサウデス
エエー
エエー御尤デス
イ　ヤ
イヤサウデスカ
イーヤ
イーヤサウデハナイ
イーエ
イーエソンナ事ハナイ

ハア左様ナラ
ハハア成ル程
ウンサウサウ
ナル程ソノ筈デス
エエーサウカネアーシ
イヤ嘘デハアルマイカ
イーヤ分ラナイ人ダ
イーエドウシテドウシテ

ウンネア　ウンネアサウデコアース　ウンネア昨日行ッテ來アシタ

インニヤ　インニヤサウデナイ　インニヤサウシナイ

人に對して挨拶する時の語

訪問して入る時　今日ハ　今晩ハ　御免下サイ

一寸見合ひせる時　御早ウ（主に朝に用う）　結構ナア　先日ハ　今日ハ御目出タウ（吉事の時）　シバラクテ　始メテ

同辭し歸る時　サヨナラ　後チ方　御明日申上ケマス

客を送る時　御靜ニ　御早ク　サヨナラ　有リガタウ

方言

いけ　語首に置てそを强むるに用う

いけすかない　嫌ふ樣子

いけどしやう　大人氣なきこと

いけやしない　飲食を貪ること

いびねる　執拗なること

いびる　物を火にて炙るなり又姑が婦を虐遇するをも云

いまあち　後刻

いつぺ　東京の一緒にと云ふこと

ばいり　速の意例ばいり放せなど

ばいあふ　奪合の意

ばつかい　蕗の蕚

ばさかる　放開の義

ほうろく　茶焙器又動搖さすることをも云

ほうつぼまへ　子供の前襟を開きてシドケナクすること

ほうだいなし　前後放心すること

ぼんのくど　後頭部を云

ぼんくら　愚鈍なる者

ぼけん　茫然たる樣子

べ　ご　牛を云又べいことも云ふ
べ　ろ　舌を云ふ
べすむ　憤怒の顔
べんぞ　小供の泣かんとする顔東京のベソ
へ　ら　饒舌なること
へづる　削滅すること
へばりつく　へばりは執念深きことつくは付くなり
とほうもない　此上なしと云ふ如き意
ちやうす　東京にてイヂルと云ふに同じ
ぢつか　細き物の密聚せる様子
ちやちや　子供が父を呼ぶ語
ちよつかい　一寸手を出すこと
ぢこねる　子供などの執拗なる様子
ちよんてろ　静かにして居れのこと
ぬつつける　悪事を人に嫁すること
わつぱか、　割果敢の義にして課せられしことを果すこと

わすら　子供の悪戯
わらし　子供を云
かばねやみ　懶惰者
かいぼう　ヘルニヤ病即ち陰嚢の脹るゝを云
がんこ　がんくび又かんた共云共に頭なり
か　ま　鐵瓶
かいちや　物を裏にすること
がつてあない　覺束なきこと
ようわり　夜業
よごれ　汚れること
よくせき　到底といふ意
よつたくれ　酩酊者又はよつきりとも云
よさつぱり　夜起して居る者
た　ら　佯醉者或は佯の義又なまだら共云
たくる　皮を剝ぐこと
たれる　大小便すること

たんべ　唾なり又シタキ共ネッ｜べ共云
たんがく　他へ移すなり
たんぱき　痰なり
たきづける　煽動すること
たかる　生物のすかること又悪口する時貧乏タカリとも云
だらくれ　頽然たる貌
だ　ど　強請すること
だつたいな　可厭又可嫌の意
だ　ぶ　鹽藏の鮪又肥滿せる女を貶しめて云語
そばいこ　あまへる子
そとかい　外の方うちかいは内の方のこと
つばけ　筒なり又聲の高きをッボケが高いと云
づほう　虚言なり又多大の意にも用ひらる
づはぐれ　分外に大なるもの又小にも用ふ
づらり　悉皆の義又滑なる形容
ねまる　坐するなり東京スハル

ねつから　意に滿たざること例ネッカラ甘クナイ
ねぶかけ　居眠り
ねつこぼり　才なき野夫を云又事物の本末を究明し又執拗に聞く者をも云ふ
ねつちよぶかい　執念深きこと
なぢやう　何様のこと
らんちく　物の亂れたる様子又ラッチモナイとも云
らちもない　大變と云事又分外の意にも用ひらる
う　の　惡口する時他を云ふ鄙言なり
うんと　多き貌又力を出す様子
う　す　語を強める接頭語
例　うすきたない　うすこぼけない(愚鈍者)
うざねはく　勞苦すること
うせない　ウルサキ事
のつぺら　痴人の形容
のんの　子供の衣服東京のべべ
のら　爲すことなくして居るもの

おほぶく　贅澤などの意
おかない　恐怖するなり東京のコハイ
おだてる　ソヽノカス事
おつちどい　遲鈍者を云
おごる　怒る東京のドナル
おぼこ　子供を云
おぶう　人を負ふこと東京のオンブ
く　ど　簡易なる竈
やりほうらい　放任の甚だしきこと
やきもち　嫉妬
やくだい　又やくど共云故意にの意
やくだいもない　無益の義
まげじか　意地張ること
まかばる　物を惜む樣子
まいだりまいだり　手數の甚だしきこと
まんざら　ましてやなどに似たり

けろ　吳れよとの約言兒童間に用ふ
けむ　詐僞
けつ　尻なり鄙言
けちな　東京ケシカランと云に同じ
けつかる　居ること鄙言なり
ふんだくる　奪ふなり
ふんぐり　陰囊を云
ぶぇん　魚の鮮なるもの
こつちや　此方へと云こと
こつぐたい　東京のクスグイと云に同じ
こつぱ　木片
こはい　疲勞すること東京の恐怖に同じからず
こがす　下げる意例帶をコガス又誑にも用ひらる
例　男をコガスなど云
こじける　機を愆る如き意なり
ごんど　塵埃なり東京のゴミと云に同じ

ごせをやく　憤ること
ごだる　粘氣あるを云
ごをら　大言壯語なり東京のホラに同じ
てつかい　手のきけぬ不具者
でつかい　物の大なること
でほうだい　多大の義又淫猥なる語をも云
でんづだんづ　物の揃はぬ貌
でつこら　肥大なること東京のデゴ
でしやばる　出ずもかなと思はるゝ場所へ出ること
でんづく　動かすこと又人畜を打擲すること
でんがい　猥褻なる語
てつしり　多きこと
てんこもり　飯など高く盛るなり
あぐと　踵を云
あんこ　兄御の轉歟下輩の若者を云
あねこ　姉御の轉歟下輩の若き女を云

あくしよ　シャクリのこと
あはまき　舅が子の婦を姦すること
あいへんど　待遇すること
あぶゆかしい　覺束なきこと
あいべ　往かぬかの意
さくづ　小糠
さつぱり　少しもの意或は清潔の義にも用ゐらる
ざんまいする　斷念する
きんか　聾なり
きつくり　オクビすること
ゆくちない　飲食を貪ること
めつこう　眇目
めつかい　果物などの下等物
めいごい　可愛の義
みそをあげる　自慢する
しなびける　萎縮すること東京のシナビル

しよろこけ　問拔け者
じやつかい　疣痕即アバタ
じやじやをこく　故意に拒むこと
じぶ　繦褸即ボロ
じやらかす　猫犬を愛し戯るゝこと
しよつぱい　鹽辛きこと
じゆぐじやれる　廿へて吩咐などきかず身をもがくこと
じゆんけがない　心ならぬ繁雜に遇ふこと
ひつぱしより　衣の裾を端折ること東京のハシヨリ
ひつたくる　奪ふこと又衣を掲ぐることヒツは引にて語勢を強むるなり例ヒツ攫ムなどの語あり又ヒンとも同じヒンマゲルヒンナゲルなどあり
ひしけ　壓縮せらるゝなり
びつこ　跛即ツンバ
ひどい　六ツかしき事又甚しきの意東京にてツライと云に同じ
びらり　速なる意
ひづる　串戲即ジャウタン

びたい　女を鄙めて云ふ語
もどかしい　待遠きこと
もぐる　洩るなり
せつちやう　打擲すること
せつく　責るなり
せつない　忙しきこと又ヤルセナイと云に同じ
せびる　强請即ネダル
せる　入るゝなり
すつかい　酸きなり東京のスツパイ
すぶと　爐を云鄙言なり

三　俚謠及俚諺

俚謠は主に世間普通のもの行はる即ちドド逸、甚句より進んでは二上り三下りの大津繪、春雨夕暮、我がもの等又新内義太夫も行はるされど地方(仙臺舊領内)に限りたるものには藩祖伊達政宗の二本松を攻むる時士卒に授けて謠はしめたるサンサ時雨と云ふものあり是は祝宴に列座する人々拍手してうたふ儀式曲なり其他田植唄等は以下

掲ぐべし

サンサ時雨

婚姻の時

「雉の雌小松の蔭で夫を呼ぶ聲千代々々と　ションガイナ

「葭になりたや二本のよしに嫁と姑の中よしに　同　上

一般の祝ひに

「サンサ時雨か萱野の雨か音もせて來て濡れかゝる　ションガイナ

（此の一曲は政宗の作なりと云ふ）

「目出度嬉しや思ふ事叶ふた末に鶴亀五葉の松　同　上

「このや族は目出度いやから四つの隅から黄金湧く　同　上

田植唄（田植する者が植えながら交互に歌ふもの）

「これから拜むぞ篁嶽を七里の御坂をかけあげて妻に御縁のあるやうに

「ござれ來なされ二十日頃二十日宵暗くらくとも裏の細道ふみ分けて

大足踏唄（田植する時田面をならすため板にて製したる大下駄の如きものに繩を付け手に取り泥土を均らすもの大足なり）

「しのびつま來たとは知らて戸を立てゝおいとしや軒端の露にうたせたや

神樂歌（神樂に二種あり法印神樂と水山神樂となり共に神事に際して行ふ俗曲なり）

法印神樂

從前の修驗の業なり神代の故事に擬せし舞をなす岩戸開より大蛇斬に至る三十三番あり太鼓笛を入れて所作を助く其樣能樂に似たり唄は「八雲立つ」の古歌に節付けして謠ひ或は滑稽を加へて

向ひ通る小ン僧めら通草からを見付けて飛んだり跳ねたり衣の袖を引つ裂いた

などゝ謠ふ其他は問答の臺詞を用ふ近來此舞曲廢れんとす又伊勢神樂なるものあり北部地方に行はる

水山神樂

其所作野鄙にして滑稽を旨とす故に唄も猥褻なるもの多し多くは問答を用ひ笛太鼓手拍鉦にて囃す此藝人は主に青年輩なり

田植踊唄

田植踊と稱して豐年を祈る趣意に出づる俗曲なり年の始めに行はる少女五七人の隊にして其長たるものは大の男なり之を彌ン十郎と稱す少女は花模樣の衣服を着け頭を飾り一名毎に小太鼓を携へ招がるゝ家に至りて踊る「ヤンドドヤアハイ御正月は御目出度いや御門松を迎ひた」など唱ふ囃しのみ多し往々男兒隊もあり

オイトコ節　（オイトコと稱する小唄は舊仙臺領特有のものなり）

唄「オイトコさうだよ紺の暖簾に伊勢やと書いたよお梅女郎衆は十代傳はる粉やの娘
だよあの子は善い子だあの子に添ふなら三年三月も裸で跣で茨も負ひましよ手鍋も
提げませう水も汲みませう可及丈朝起き上ぼる東海道は五十と三次粉箱擔いてある
かじやなるまいオイトコサウダヨ

鹿踊唄

方言鹿を獅子と稱す此の踊りは頭に彫を戴き假面獅子、頭を被り綏やかなる上着を
着し笛太鼓の囃しに乘りて踊る昔時より地方に行はるゝ俗樂なり文化年中藩主伊達
侯の御覽に入れし時行山なる者なりとの言ありしより行山踊とも稱す此時侯より侯
の紋所竹に雀及び九曜星の御紋を用ふる事を許さる元祖は大原町に在り伊達獅山公
幼年の時歌を賜ふ故に舞衣の脊に此歌を記せり

「陸奥のをしかの藤牡鹿の里聲を揃へて遊ぶ鹿かも
「秋萩をしがらみなせて鳴鹿の目には見えずと音のさやけさ

舞の唄は

「紫竹しの竹矢柄竹小風にもまれて節は揃はぬ……
「鶯は澤の櫻に巣をかけて其巣をひかれて櫻うらみる……

長持唄（是は婚姻の時長持又は箪笥を擔ぐより石かつぎ木かつぎなどする者が歩調を取るためにうたうものなり或は麥打などに用ふ）

「氣仙坂や七坂八坂十坂目にや鉋をかけた坂がある
「音にきくや黄海の宿の七日町前は川や後には繁る小松山

甚句唄（此唄普通のもの行はるれど左に擧るは地方の作ならん）

「酒も飲むべし上は氣もしやんせしまる時にはしまらんせ
「飲めやうたひや三十は盛り三十過れば其子が踊る
「油高いとて宵から寢れば米の高いのに子が出來る

童謡手鞠唄

「御正月は〳〵門に門松内には手掛手掛盆には榧に勝栗神馬藻〳〵
「二月は〳〵鳶天旗空には着きよ糸引なければ通はれぬ〳〵
「三月は〳〵御雛飾りに淺葱繪御内裏様の桃の酒〳〵
「四月は〳〵四月八日の御釋迦様誕生誕生參には孫つれて〳〵
「五月は〳〵菖蒲さし〳〵軒端の下で小供寄合ひ花軍〳〵
「六月は〳〵おぼこ達の帷子おりよ女帷子奈良晒〳〵
「七月は〳〵盆に盆棚御前の切籠切籠燈して面白や〳〵
「八月は〳〵芋や大豆や御名月様よ小袖貸しませうか色小袖〳〵

「九月は〳〵 稲の刈り初め刈り收めにほに積んだも面白や〳〵

「十月は〳〵(未詳)

「十一月は〳〵 小雪さら〳〵 降る時は猫の足跡梅の花〳〵

「十二月は〳〵 大綿帽子に顔隠し觀音參りに孫つれて〳〵

「姉がまけるか妹がまけるか姉が負けたら一生の耻よ一ト耻かいた二耻かいた三耻かいた〳〵〳〵

「受取つた〳〵どなた様から取取つた向の白壁格子造りの暖簾かけたるおさとさんから受取つた〳〵たん〳〵 確かに御渡し申すぞ

子守唄

「ねんねこ〳〵ねんねこやねんねこしやんせねんねんねんやおらが坊さまよい坊さまおねんねしやんせねんねんせ

お國節

御國語(おくにかたり)といふものあり古來の傳記物を節付けて語り三絃に和す彼の薩摩琵琶などに似たるものなりしが今日はすたれたり是舊仙臺領特有の語り物なりし

俚諺

命あつての物種(命は第一の意)

一時三年假末代(一寸の間と云ふも三年に延べ假と云へば末代となる惰性)

鳩の口さ大豆(望のある所へそれに適する事をする)

鼻を曲げても息をつけ(恥を忍んでも利に付)

八卦半山刀八ッあたり(八つ當りは怒を他にまて及ぼすること)

袴と沙汰は掛り次第(袴は切れてもかゝるまで齋訴訟はかゝるだけ金をかける)

似合似合の釜の蓋(われなべにとぢ蓋と同じ意相應なるを云ふ)

年寄と釘頭は引込んだがよい

地藏の顔も三度(堪忍者も袋の緒をきれること)

チー丶丶にも一生カー丶丶も一生(遊びても一生貯へても一生といふこと)

地震雷火事親爺(怖るべきもの)

ガキも人勢(ガキは方言兒童を云ふ兒童も多數なれば大なる力あり)

糟食つた犬は逐はれないで笊をなめた犬は逐はれる(主者はしれず從者のせめられる)

河童の川流(上手振すれば失敗を招ぐ)

嫁は木尻から取れ(木尻は下座の方言婦は富家より取るなの意)

道樂者の節句働(平日遊んで居る者は休日に働くまねする)

何事も三度(失敗に懲りずして行へば遂に仕とげる)

染屋の明後日七十五日（約せし期日を延ぶる事）
當つて碎けろ（成らぬなら直に行つやれ）
染屋の白袴（口に言へど行はぬ）
朝酒三杯其日の道樂（朝酒飲めば其日は働けない）
人の噂も七十五日（噂は日を經るに從て消滅する）
人の褌て相撲を取る（他の惠に依りながら我が力ぶりをする）
牛も十里馬も十里（遲かれ早かれ同じく一事をなす）
やるせない時の神頼み（常に信心なくして切なる時のみ祈る）
へらの尖て約もれば鍬の尖て約もる（食はせなければ働かぬ）
世間の口には戸がたてられぬ（世間の噂は自由なもの）
人の疝氣を我頭痛（他人の事まて無益な心配する）
運と果報は寢て待て（善き運は何時かは運り來るといふことされど是は諺にて寢てまては寢ずして待ての意）
手ン坊の手配り（手ン坊は手のきけぬ者の方言窮すれば通ずといふこと）
七月青田と三十馬鹿は直らない（秋の青苗と三十才になつても改めぬ者は直らない）
災も三年置けば用立つ（ッマラヌ者でも長く貯へおく内に用立つ）
女賢して牛賣られない

此俚諺に就き說話あり或骨董家の女房の留守に客ありて屋（一本角）の畫幅を直百金にて買はんと云ふ女畫を見て謂へらく一本角の牛てすら百金と云ふ況して二本ならば二百金には賣り得べしと竊かに考へ明日を約し其の夜の內に角一本描き足し置きしに翌日客來り之を見て安價にも買ふことを欲せずして直ちに歸れりと云ふ
飛車取り王將（乘引ならぬ事に云ふ）
三ッ子の魂七十三まて（幼時の性情は老ても變らぬ）
おどけ半分實交り
さかしい雜魚は陸へ上る（河童の河流れと意同じ）
鶉も木さ上る（生活に困みては如何なる勞苦も厭はぬに云ふ）
死人にとゞめ（打擊を加へた上に又加ふること）
人の痛さは三年も泳へる
上げたい一杯食べたい三杯（客より自分は食ひたい）
宿八割の損（人の集合する家何角損がある）
人の袴さ足を踏み込む（他の權利を犯すこと）
眼千貫胴六十（身體中眼は胴より大切なること）
見ないば淸し

牛賣て荷鞍氣張る（主物を賣りては附屬物を高くせんとの掛引）
貧乏者に親類なし（貧すれば親類も遠ざかる）
麥飯で鯛を釣る（贈物少うして受くるもの多きを云ふ）
善は詰めろ惡は延ばせ（善事は障りが出安い故早く果せ惡事は延ばし置く内には變じて善となる）
八細工七貧乏
貧乏者が灰を燒けば風が吹く
干糞を嫌つて生糞を攫む
我が身の臭さ我知らず
傍を見て鼻をかめ（注意し嘶せぬと傍に其れに當る人が居る）
峰から入れる鋼は役に立たぬ（性來の痴者には訓誨しても効がない）
小糠三升持つたら婿に行くな（獨立生活の見込あらば他の婿になるな）
長いものには卷かれる（弱者は强者に厭せらる）
足元の明るい中に果敢揚りする（退く場合を知るなり）
弱り目に祟り目（不幸の上に不幸）
鼬の無い山貂の樂（監督者なき時は安樂）
隣の物は稗粥も旨い

昔話

昔話は即ち御伽噺なり明治初年までは家母や伯叔母又は姉などが兒童に語り聞かして興がらせ家庭教育の一助ともせしが現今は廢れたりこゝに地方にて作爲したるものと思はるゝもの二則を掲げん

（一）

小僧と云ふ者は幼年より寺に仕ふる故艱難辛苦を嘗むる故に怜悧になる者なり或寺に小僧あり方丈に仕ふ方丈或時竊かに醴をかもして小僧に知らせずに飲みたり或日小僧に見られじと厠に携へ行きて居たるを知らて小僧も厠に入らんと戸を開けしに方丈甘酒を飲み乾し居たるを見てスカサズ方丈さん御代りを持て參りませうかといひしとぞ

（二）

昔或寺の方丈福手餅を戸棚に貯へ置き小僧を留守居として托鉢に出でゝ歸り福手餅を檢べしに半分にしたるもの殘れり方丈小僧に
　十五夜に片破れ月はあるものかと
問ふ
小僧爐中の暖かなる灰の中に火箸を刺し炙れたる半片を示して

雲にかくれてこゝに半分
と答へしとぞ

大正十四年二月二十五日印刷
大正十四年二月二十八日發行

發行所　岩手縣教育會東磐井郡部會
　　岩手縣教育會東磐井郡部會
發行人　代表者　會長　加藤守道
印刷者　岩手縣盛岡市內丸十番戶　山口德治郎
印刷所　岩手縣盛岡市內丸十番戶　山口活版所

終